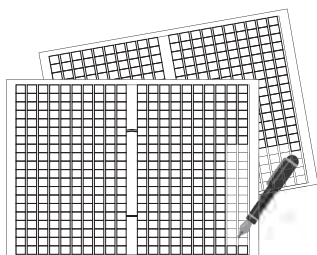


# 第2回ふるさと秋田文学賞

## 受賞作品集



## 第2回ふるさと秋田文学賞



## 目次

### ● 最優秀作品

- 随筆『横手盆地で農を継ぐ』 鈴木 良・・・5  
「最優秀賞」受賞者のことば 『本音で書くということ』 36

### ● 優秀作品

- 小説『みちのく鬼譚』 森 川 瑠美子・・・39  
「優秀賞」受賞者のことば 『男鹿からの声』 74  
小説『いつか、夏が終わる前に』 渡 部 麻 実・・・77  
「優秀賞」受賞者のことば 『遠きにありて思ふもの』 112

● 選 評

「取材を増やし、偶然を減らせ」

内 館 牧 子  
・  
・  
・  
・  
116

「二歩上に」

塩 野 米 松  
・  
・  
・  
・  
120

「選評」

西 木 正 明  
・  
・  
・  
・  
124

● 作品募集要項・応募者内訳一覧

第2回ふるさと秋田文学賞最優秀作品

横手盆地で農を継ぐ

鈴木良・作

横手盆地で農を継ぐ



誠におこがましいのですが、この作文を読んでいただけだと思います。

昭和四四年（大阪万博を翌年に控えて、日本は経済大国への階段を猛スピードで駆け昇っていました）、当時、秋田県立大曲農業高校の二年だった私が書いたものです。四百詰め原稿用紙で三枚程度の短文です。

＊

こんな仕事に一生を捧げたい

農業なくして、私の将来はありません。農業高校に学んで一年半、未熟ながらも、将来の自分の農業をみいだすことができました。従来のお米づくりに、父の始めた養豚、それに私の花作りです。この三連の農業経営が、私の農業なのです。

農家の跡継ぎとして生まれた私は、宿命のままに農業への第一歩を踏みだしました。農業を<sup>はだ</sup>膚で感じながら、懸命に自分を農業にはめ込もうと努力しました。

三人の仲間と農業を語り合うグループを作り、「県南の農業を語る」の題のもとに、アンケート

トを中心に活動を始めました。また、私自身が小さい頃から好きだった花を農業に取り入れるべくして、一千本のアスターを植え付けました。

しかし、農業は甘くなかったのです。グループ活動のアンケートは回収率、回答率とも悪く、最初からつまずいてしまいました。アスターのほうも、六月上旬に発生した斑点病が<sup>はんでんびょう</sup>一雨ごとにひどくなり、数回の薬剤散布も効果なく、ほとんど出荷できずに終わりました。農業の厳しさは、労働だけではなかったのです。そして、私の農業に燃えた初めての情熱の炎は、わびしく消えていくのでした。

そんなある日、ふとしたことから、ある劇団の公演を見る機会を得ました。戦国の昔の農村の貧しさ、悲しさをうたいあげた『うばすて』という作品でした。当時はたいした米もとれず、自分たちが生きていくのが精一杯でした。それゆえ、年老いて働けなくなった者は、山に捨てられたのです。自分を生み育ててくれた母親まで、捨てなければならなかったのです。自分の手で……。捨てられた者たちを待っているのは、飢えと寒さからくる死のみです。死にとうない、まだ働けるとわめく老婆。母親に死んでくれと頼む息子。ばあさんがかわいそうだ、かわいそうだと泣きじゃくる子供……。そして、彼らはこの悪習をなくすべく、強い団結のもとに立ち上がるのでした。会場に涙を誘った熱演でした。



この演劇を見て、私は自分の考えの甘かったことに腹が立ってしようがありませんでした。今日の農業は、過去数百年の農民の汗と涙の結晶なのです。私には虐げられながらも強く生きてきた農民の血が流れているのです。今こそ、農民の卵として、汗みどろになって農業を自分のものにしよう。農業こそ、自分の一生を捧げても悔いのないものなのです。

今年の失敗も来年こそその意気込みに変わり、ハボタンとチューリップも導入して、花作り経営の基礎を着々と固めています。グループ活動も同じです。現在の複雑な農業は、私にとって、石ころだらけの長く暗いトンネルです。しかし、農業への情熱の灯で照らしながら、明るい出口のあることを信じて前進していきます。

\*

稚拙な文章と青臭い決意は、全くもって気恥ずかしい限りです。生真面目さに閉口されたかもしれません。お詫びします。

この作文は『第一六回NHK青年の主張全国コンクール』に応募したものです。〃青年の主張〃は、昭和二九年から毎年開催された弁論大会です。第三五回を数えて、『昭和』とともに

終わりました。全国の二〇歳前後の勤労青年や学生が、それぞれの思いをエネルギーに訴えていました。都道府県大会と地方大会を勝ち抜いた十名の熱弁が、『成人の日』にテレビで全国放送されました。

秋口に応募した原稿が、秋田県予選の一次審査を通過しました。秋田市のNHK放送局で、実際に発表することになったのです。その通知が学校経由で届きました。学級担任は絵に描いたような若い熱血教師で、弁論部の顧問でした。

早速、臨時入部させられ、発表の特訓を受けました。発声練習に始まり、アクセントのチェック、適切な抑揚と間の取り方。何よりも、自信を持つて訴える気構えを、徹底的にたたき込まれました。大会前の一〇日間は、学校協の雄物川おものかわの土手に立って、枯れ葦野あしのに向かって練習を繰り返しました。お陰様で、思いもよらない秋田県代表になりました。一二月に、仙台市で行われる東北大会に出場することになったのです。

当時、私が何のきっかけでこの作文を書いたかは、思い出すすべもありません。ただ、あの頃、農家の長男として、就農しゅうのうを定められた運命を、必死で受け入れようとしていた気がします。今思えば、随分と恵まれた環境にいました。中学校の同級生の半分が、集団就職で上京して

いました。学校では、部活三昧さんまいの毎日でした。軟式庭球です。それでも、時たま、息苦しいモヤモヤ感に襲われることがありました。卒業と同時に就農です。漠然もくねんとした不安と、職業を選べない不満が絡み合っていたと分析しています。

その頃、田植機や除草剤が普及し始めて、腰を折っての田植えや草取りから、解放される兆しがありました。秋作業も、自脱じだつコンバインの出現で大変に楽になっていました。それでも、米作りはまだまだ過酷な労働がたくさんありました。代掻しろかき後の畦塗あぜりや真夏の消毒が、その代表格でした。

また、他産業との所得格差の是正が農政の基本になっていたほど、農家の収入は低かったのです。更には、〃どん百姓〃の言葉に集約されるように、いわれのない社会的侮蔑おうえつのおまけ付です。当時も、農業はきつくて、儲からない、格好の悪い職業に変わりありませんでした。農家を継ぐというのは、そんな泥沼に自分から足をつっ込んでいくことです。

確かに、農家はわがままのきく自由業です。親の身代にあぐらをかき、いずれは田畑を相続する総領そうりようの甚六じんろくと擲揄やゆされるかもしれません。農家だつてピンキリです。農地の所有面積が違います。全員が土地成金なりきんになれる訳がありません。その頃は、農家が農地を手放すなど、もつての外だとする時代でもありました。

私が生まれ育ったのは、平場の純水田地域です。集落の一一戸の全てが、専業の稲作農家でした。どの家の長男も、学校を卒業すると、その春から田んぼに出ました。じいさんにも、親父にも、お前が家業を継ぐのだと言ひ渡されたことはありません。暗黙の了解というか、自然の成り行きだと思っていました。思ってはいましたが、農家を継ぐのは心底嫌でした。かと言って、それ以外の職業など、自分には描けない環境でした。

農業高校のクラスメイトは、ほとんどが農家の後継者でした。個性を丸出しの、はちゃめちな連中でした。でも、最後は背筋をびんと伸ばして卒業証書もらい、秋田県南の各地に戻っていききました。

——肩で風を切りながらも、涙目で童謡をハーモニカで奏でていた応援団長は、旧仙北郡協和町へ。

——絶妙なバックボレー以上に、ナンパに小技を発揮していた庭球部の副将は、田沢湖のほとりへ。

——横手市の水田地帯のど真ん中には、無許可のバイク通学の重犯で停学をくらっていた、スピード狂のK君。

——野武士のような氏名の無口な伊達男は、一本刀を背負って湯沢市のさくらんぼの里へ。

みんなは、米を基本にして、新たに畜産や野菜を組み入れた経営をめざしていました。就農の選択は、たぶん私たちに突き付けられた最初の試練だったと思います。立ちふさがる現実に対し、逃げたり、乗り越えようとしたり、いつそ壊してやろうと息巻いたりして、未熟な挑戦をしたはずです。最終的に農業を継ぐと決めたことは、ひとつ大人になった証であつたかもしれません。

クラスメイトが宿命を受け入れた過程は、様々だったと思います。私の場合はどうだったのでしょうか。「私は農業で生きる」と公言し、胸の奥に丸めたモヤモヤ感を鉄鎖<sup>てつさ</sup>で縛りつけました。それを空言にするのは一番の偽りだと戒め、逃げ道もふさいでしまいました。誠に息苦しい方法でした。そして、自ら苦難の道を歩みだす「悲劇の主人公」を演じて、ちょっとした高揚感に浸っていた気がします。

おそらく、それらが「青年の主張」の原稿を書かせた深層だったと思っています。

東北大会のことなら、楽しい思い出です。大会はNHK仙台放送局で、テレビ収録されました。本番直前になって、私は緊張のせいか、鼻血が出て止まらなくなっていました。スタジオ前のソファーに横になっていると、濡らしたハンカチを渡して眉間を冷やすように促して

くれた女性がいました。鼻に詰める球状の脱脂綿もくれました。

彼女は福島県代表の看護師さん。もはや容姿の像を結ぶことはできません。彼女は、お札の顔よりも感情のある顔を見たいと、銀行員からの転身を発表したと記憶しています。審査の結果、彼女が優勝して、翌年の『成人の日』に全国大会に出場したのです。彼女の勝利に妙に納得し、心から拍手を送った覚えがあります。

東北大会を楽しく思い起こせるのには、もうひとつ理由があります。審査員だった東北大学の老教授が、胸のモヤモヤ感を吹き飛ばしてくれたからです。私の発表を聞いた彼は、穏やかな口調でこう言ってくれたのです。

「君はその若さで、今、どうして将来を決めてしまうのだい。少し肩から力を抜いて、周りを見てからでもいいのじゃないかい」

ほっこりとした言葉でした。農家の長男だからといって、何も無理して家業を継がなくてもいいのだよ、と教えてくれたと思いました。作文に書いて主張したから、後継者になると意地を張らなくてもいいのだよ、と諭してくれた気がしました。背負っていた重荷が霧散する爽快感がありました。

一泊して、翌日、仙台駅前の映画館で、ダスティン・ホフマンの『真夜中のカーボーイ』を

見ました。それから、大盛りの牡蠣フライ定食を食べて、帰りの電車に乗りました。

ともあれ、東北大会の模様は、その年の暮れの夕方、教育テレビの東北版で放映になりました。その日は雨雪で、電波状態がよくありませんでした。白い砂塵さじんの中に私の姿を確認しながら、家族みんなで見ました。じいさんがボロボロと涙を流していました。両親が顔をほころばせていました。はしゃぐ妹たちには、兄貴としての威厳を示すことができました。

以上が、昭和四四年の秋から冬にかけての、〃青年の主張〃に係る顛末です。

\*

朝霧あさぎりが這う横手盆地よこてぼんちの青田の太平原。東西に突っ切る細い農道。ぽつんと止まっている軽トラック。後のあおりを下ろし、荷台に座って足をぶらぶらさせています。私は今年の正月で、満六二歳になりました。

今、日の出前から始めた、田んぼの草刈りを終えたところです。刈払機かりはらいきを背負って、朝露に濡れながら、畦あぜの雑草を散髪してやりました。タオルで汗をぬぐい、水筒の水をごくごく飲みました。ひんやりとした朝の空気が心地よいです。耳には、刈払機のエンジン音がまだ残って

います。

実は、刈払機での畦畔くわの草刈りは、もう時代遅れなのです。みんな充電式の噴霧器で除草剤を撒いて、根こそぎ枯らしています。県の農業機関でも、使用の基準となる薬剤を公表しています。枯れただれた雑草とむき出しの土を気にしなければ、極めて省力的で効果の高い方法です。

でも、例えば、水彩絵の具で、田々という字を書くとしたら、土の茶色よりも、草の緑の方に趣があると思います。米作りを演じる晴れ姿は、野草の花々が順に咲く田んぼの額縁に納まってなんぼです。そんな屁理屈をこねて、まだ、刈払機でとろとろと畦草を刈っている次第です。

秋田県横手盆地。南西にそびえ立つ鳥海山ちやうかいさんが、雄大な金字形を描きます。左右の裾野は蒼い両腕となつて輪を作り、北東の真昼岳まひるだけの辺りで手を組みます。右手は筋骨隆々の奥羽の山脈。左手は華奢でなだらかな出羽丘陵でわきやうりやうです。

名山が腕に抱く、南北五〇km・東西二〇kmの緑の大地。両腕の根雪が融けて、谷川を下り、毛細血管のごとき水路を伝わって、広大な水田を潤します。やがて夏が来ると、壮大な青田となって、吹き渡る風に波打ってなびきます。そして、秋には見渡す限りの豊穡の里が広がるの



です。

太古、ここは湖の底だったといひます。その湖を干拓した二組の長者伝説があります。一組目が明永・明保長者で、水尻だった北西部の谷を掘り切つて、湖水を日本海に落としたそうです。今の雄物川です。

その末裔である万徳・地福長者。拓けた湖底に四八の作業小屋を置いて、墾田を始めたといひえられています。その名残の小屋がついた地名がたくさんあります。氏名のついた斉藤小屋・太郎小屋・六郎小屋。場所を示した北小屋・上小屋。大倉小屋、板小屋、福小屋というのもあります。

郷土の歴史家によると、長者伝説は平安時代中・末期の辺境の豪族たちを暗示させるそうです。やがて、彼らの中から出羽の清原氏が現れて、歴史の表舞台に踊り出ていったと語ります。今は二一世紀。悠久の時の流れを実感します。ずっと変わらないのは、群青の稜線とそこから上に広がる無窮の青空です。

この地で、三代、米作りを生業としてきました。明治三〇年生まれのじいさん。昭和四年の親父。同じ二八年生まれの私です。盆地の山から鳥瞰すれば、けし粒にもならない二ha余りの水田です。そこにしがみつき、家族が一緒になつて泥にまみれ、汗にまみれて、生活を紡いで

きました。

ここから巣立っていった者。ここに嫁いできた者。ここで土に戻った者。賑やかな大家族の夕餉ゆづげの声が聞こえてきます。世帯主の晩酌は、自家製のどぶろくから二級酒、そして、缶入りの発泡酒と移りました。どの世代も楽ではなかったけれども、そんなに貧しくもない、ささやかな幸せがあったように思います。

現在、稲は幼穂形成期ようほけいせいきという生育段階を迎えています。若い稲穂ができる時期です。一本一本の茎のなかで、1cmに満たない白い産毛のような命が息づいています。孕はちんだ稲は葉色を濃くして、ぐんぐん草丈を伸ばします。追肥をしたり、水を入れ替えたり、手を抜けない日々が続きます。

もう二〇日もすれば、横手盆地の水田は一斉に穂を出します。長者たちが四八の作業小屋で種粃たねちみを落としてから、いったい何代に渡たって、結実を積み重ねてきたのでしょうか。一年一代、千年は優に超しているのでしょうか。

農業高校を卒業して二年後、二〇歳の時に、私は農家を継ぎました。

「宿命に逆らえずに就農したのではない。自らが職業の一つとして選択した」

そう言つて、当時は胸を張っていました。翻ひるがえつてみると、そんなふううそぶくのは、どれだけ農業を嫌っていたかの証左しやうさに外なりません。

当初の予定では、従来の米作りに、父親の始めた養豚、それに私の花作りを加えた経営でした。しかしながら、私の選んだ複合部門は、兼業でした。私はどうしても農業が好きになれませんでした。きつくて、格好悪くて、儲からない仕事だという先入観から、抜け切れないでした。かと言つて、他に懂れる職業もなく、家を飛び出る勇氣もありませんでした。

思い悩んだ末、妥協の産物で、地元の農業団体に勤めたのです。実家に残るので、長男の責務を半分以上は果たしたつもりでした。農業関係の仕事だということで、どこかで安心してゐる自分もいました。自ら描いた農業経営に対しては裏切り行為でしたが、後ろめたさはそんなにありませんでした。たとえば、トラックで肥料を運ぶ助手だったりしても、農家のサポートをする仕事だと思えば、上り酒に悔悟かいごのえぐみは薄まりました。雑味ざつみが消滅するまで、そんなに時間はいりませんでした。

結局、養豚と花作りはできませんでした。機械化が進んだ米作りだけは、勤めながら続けてこれました。週末と朝夕で、農作業をこなしてきました。昼食もままならず、トラクターに乗ったままアンパンをかじつて、代掻しろかき作業をしたこともあります。徹夜で会議資料を作り、

そのまま出勤時間まで草刈りに出た時もあります。秋の収穫作業は、いつも集落で一番後でした。時雨しぐれにうたれながらコンバインの籾袋もみぶくろを担ぎました。そんな苦労など、兼業農家なら誰でも経験しています。私など、計画的に休みが取れた分、恵まれた方です。

最初の勤務先に、定年までいました。職場を去るに当たり、四〇年を経て、再び、就農か否かの選択がやってきました。宮仕えしていた身は、ほとほと疲れ果てていました。農業の專業化は、安らぎの場として目前にありました。長い放浪の旅から戻って、久しぶりに帰宅するよくな心境でした。退職後、米作りに専念するのに、何のためらいもありませんでした。

農作業の本当にきつい部分は、若い連中に手伝ってもらいます。格好の悪さなどは、もう気にならない歳です。儲からない点については、隣家の同業の先輩の自虐ネタに、うなずくしかありませんでした。的を射た言い回しだと思っています。

「米作りなんか、年金受給者の俺たちが趣味でやる商売さ」

俄然がぜん、忙しくなりました。何となく気ぜわしく、胸がわくわくしていました。久しぶりに、あふれる躍動感に包まれました。

——あそこの排水路端の畦あぜは崩れそうだから、早速、補修の手配をしなくては……。

——農機も中古ばかりだから、至急、全面的なメンテナンスにださなくては……。

——ずっと間に合わせの稲作りだったから、短時間で稲の生理の勉強を仕直さなくては……。  
——納屋が古い農具や使い残しの資材で詰まっているから、直ちに、かたづけで店開きをしなくては……。

四年前、万全の態勢で、新職場の雪解けの水田に立ちました。あれから毎年、田んぼに付き切りで、米を作ってきました。

「父さんの米作りは『カスタネットの二拍子』だね」

妻が笑います。タン、トン、タン、トン……。タンでたたき、トンで休む二拍子です。タンは上作、トンは不作で、一年ごとの繰り返しだと、からからと笑います。

昨年は、早々と倒伏<sup>とうふく</sup>させて、収量低下をきたしてしまいました。一昨年の米は、まずまずの仕上がりだったと思います。その前の年は、畳を敷いたような田んぼで稲刈をした覚えがあります。前年の失敗の経験が、教訓として一年だけしか持たないようです。

強風や豪雨の物理的な力で倒伏するのは、自然災害です。しかし、恵まれた天候の年に倒してしまうのは、人災です。大方が、幼穂形成期の追肥の時期と量の失敗です。なぜ、あんなにせっかちに早く肥料を撒<sup>ま</sup>いてしまったのか。どうして、あんなに多く施してしまったのだろう。反省しきりです。要は、早く多くの肥料をやって、多収穫<sup>ほとく</sup>を狙おうとする欲深い考えが原因です。

今思えば、親父もそんなに米作りが上手ではなかったです。随分と倒伏させていたと記憶しています。彼の擁護のために申し上げれば、田んぼに入れていた養豚の堆肥が災いしていた気がします。豚に踏ませた稲わらを腐らせた肥料です。これは成分のコントロールが難しく、必要な時期に肥効を発することもある代物でした。自家製の肥料での挑戦が、裏目にでた結果だったでしょう。

さて、今年はどうしましょう。追肥の時期となりました。昨年の失敗を肝に銘じてはいます。ちなみに、今年はタンとカスターネットをたたく、上作の番です。トンをはひとつ増やし、タン、トン、トンの三拍子にされて、妻に踊り出されたら大変です。

陽がだいぶ高くなりました。朝霧も随分と晴れてきました。稲の刃先に張った野の蜘蛛の巣が、あちらこちらで光輝いています。さつき、早起きのハグロトンボが足元で羽を休め、すぐ立ち去りました。昨日はオニヤンマとすれ違いました。昔も今も格好いい雄姿でした。

農業高校を卒業して、四四年になります。あらかた半世紀です。この間、農作業も随分と様変わりしてきました。

歩行型の田植機の登場は画期的でした。手植えの重労働を農村から一掃したのです。最初は

二条植えで、すぐ四条に増えて乗用となり、六条、八条と大型化しました。現在は、元肥もとごえと除草剤の散布が一緒にできる機種が主流です。

秋作業も著しい進歩を遂げました。稔った稲を鎌で刈って束ね、棒杭ぼうくわいで天日乾燥させていました。乾くとリヤカーで納屋まで運んで積み、脱穀だつこく・粳摺りもみすをして、俵たわらに詰めて出荷しました。今は、乗用コンバインで刈取り、生粳なまもみを火力乾燥機で一気に水分を飛ばす時代です。生粳を搬入すれば後はお任せの、大型乾燥貯蔵施設（カントリーエレベーター）も活躍中です。

卒業時に重労働の代表格だった畦塗りあぜぬや消毒も、もうすっかり軽減されました。トラクターに取り付けた作業機が、土を持ち上げてきれいに畦に塗ってくれます。炎天下でやった病害虫防除の消毒は、無人ヘリコプターが担っています。

公の統計によると、現在の稲作の労働時間は、一〇a当り二三時間ちよつとのようです。私が農高生だった時分の、実に五分の一に短縮になったのです。まさに、機械化がなせる業わざです。

農政も、とことん変化してきました。農家が農政を語る時、ずっと「猫の目」に例えてきました。いかにくるくる迷走してきたかは、米の生産調整（減反）の移り変わりをたどれば、一目瞭然です。

この政策は、昭和四五年、全国的な米余りを背景に始まりました。毎年、個人の減反面積

が、国から県、市を通じて配分になりました。減反の比率は当初は一〇%程度でしたが、ずつと三〇%台に高止まりし、今年は過去最高の四二%強です。

「ただ、田んぼに稲を植えないで、休んでもらえれば結構なんですよ」

「これからは、大豆とか野菜とか何でもいいから、稲以外のものを植えてくれないかな。稲からの転作という形にしたいんだ」

「やっぱり、ちゃんと販売するものを植えてくれないかな。奨励金も出しているんだしさ」

「ああ、加工用の米や家畜の餌にする米だったらいいよ。でも、その代り、価格は原価以下だよ」  
「おーい、今年は集落のみんなが配分を達成すると、奨励金が上乘せになるぞ」

その減反を、三年後には全てやめると、国から発表になりました。農家が、猫の目々と農政を嘆いている間に、国は権力と奨励金を武器に、野望を成し遂げようとしていたのです。野望とは、米を主食の座から引きずり落として、ダイコンと同じ番付にすることです。つまりは、経費のかかる米との直接の関わりをなくし、市場経済に委ねるのです。輸出入も自由にするのです。農家の心情などおかまいなしに、四〇数年かけてじんわりと野望を達成するのです。

『国家には勘定はあっても、感情はない』



言い得て妙な古人の名言です。

今日の草刈りはこれで終わりです。刃物が回転する機械なので、集中力を切らさないように、一日二時間以内に決めています。遠くを横切る県道で、通勤の車が多くなりました。周りの田んぼを見回しても、ひとつこ一人いません。毎朝、田んぼの見回りに来る隣家の先輩も、今日は見当たりません。

農業は自然が相手だったり、生産物の価格を自分で決められないところもあったりして、<sup>〃</sup>ふけさめ<sup>〃</sup>のある商売です。<sup>〃</sup>ふけさめ<sup>〃</sup>とは、浮き沈みを意味する、こころ辺の古い言葉です。それは、エレベーターのような直線的な上下動をイメージしません。月日の流れを横軸に、なだらかに緩んだ波状曲線を描くのです。農家は、曲線の底に沈んでいる時も、やがてやって来るしなやかうねりを信じて働いてきました。しかし、今、<sup>〃</sup>ふけさめ<sup>〃</sup>の曲線が、奥底で切斷されようとしているのです。

数年の内に、家族経営の稲作農家は、壊滅する運命にあると思っています。農家の誰もが、そんなことは考えていないようです。ちっと変だなと感じていても、いずれ、いつものように好調の波が巡ってくると、高を括っています。

原因は、昨年の米価の暴落です。米の販売価格が生産費を割り込みました。私が就農してから、初めてです。驚くことに、私が農高生の頃と同じ水準の低価格です。官製はがきが七円の時代に、米価だけが逆戻りです。しかも、今後もしり貧の傾向が続くとみられ、回復する要素はとんと見つかりません。深刻な状況です。

米の需要が消費減退や高齢化で年々少なっているのに、生産量は増える傾向にあります。国は減反をやめると言います。意欲ある農家にもっと自由に米を作ってもらい、成長産業に押し上げると豪語しています。でも、生産量を制限して価格維持する機能は、もうなくなってしまうのです。

大方の農家は、奨励金はもらっていたものの、仕方なく減反に協力してきました。今回の減反廃止で、稲の作付けが増えます。私も、自宅裏で長年減反している一五aの大豆畑に、稲を植えることになると思います。たいした手入れもしない、奨励金目当ての元水田です。もう収入がないのだから、安くなっても幾らか稼げる米を作ります。まさに、自分で自分の首を絞める構図です。更には、今後の貿易の自由化交渉が絡んで、どんどん輸入される米も、価格を押し下げる圧力になります。

しかしながら、農家は少しぐらい米価が下がっても、なかなか米作りをやめません。家族経

営の農産物価格は、肥料代などの必要経費と自家労賃<sup>じかろうちん</sup>で構成されると教えられました。価格が下がっても、自家労賃分を削った形で帳尻を合わせて、生産を続ける訳です。たとえ最低賃金を下回ったとしても、まだ実入りがあるうちは、作り続けるのでしょう。ゼロになった時、そこが、規模の大小や専業・兼業の別を問わず、農家が消滅する土壇場<sup>どたんば</sup>になります。中にはマイナスになっても、先祖から受け継いだ田んぼを守らなければと、赤字にすぎ込む人も出てくると思います。しかし、そんな奇特<sup>きとく</sup>なことは、経済原理の前では長続きしません。

いずれ、田んぼを耕す者がいなくなれば、横手盆地の風景は一変します。最初に水路がガタになります。毛細血管があらこちらで崩れて詰まり、やがては、大動脈の雄物川が機能不全に陥ります。水尻が埋まって塞がると、横手盆地は再び満々と水を湛えた太古の湖に戻るのです。そして、長者たちが水を抜いた時に地中深く潜って眠りについた連中が、甦るのです。

——大あくびをしていた一戸建てクラスの黄金の田螺。復活がうれしくて、転がり回る。転がり回る。

——一斉に芽吹いた水藻が育んだ湖底の黒い森。赤ずきんのメダカが迷子。助けに行つて、素潜り名人のゲンジボタル君。

——岸边では、シエルピンクの大鯰<sup>なまず</sup>とレモンイエローの大鰯<sup>かな</sup>の縁台将棋<sup>えんだいしょうぎ</sup>。投了目前の大鯰が、

起死回生の一手を指してご満悦。

——鶴翼<sup>かくよく</sup>に陣を布<sup>し</sup>いた兆の単位のタガメ軍団。それに突撃していく、これまた兆を超えるゲンゴロウの兵団。

あながち絵空事ではない光景です。

刈払機を軽トラックの荷台に乗せて、運転席に座りました。助手席に、完熟したトマトが一個。出がけに畑からもぎ取ってきたやつです。まだ朝露に濡れて冷えています。がぶりとかぶりつき、汁で汚れた口元を、手の甲でぬぐいました。

もう、〃米農家壊滅〃の悲観論は、ここまでです。農家が被害者意識に凝り固まるのは、おかど違いです。禍をもたらした国というのは、紛れもなく自分たちが選んだ者たちが作ったものです。それと迎合して、甘い汁を吸ったこともあるのだから、弱者ぶってはいけません。これだけの危機に遭遇して、いったい自分に何ができるか思案中です。すでに、導くべく結論は出ています。この地で生き残るしかないということです。ありったけの知恵を振り絞るのです。磨いた感性を研ぎ澄ますのです。大地を耕して食物を産する者の強さを、発揮するべき時なのです。

やはり、私にできる手法は、一七歳の秋と同じです。『青年の主張』の原稿を書いたように、まずは、大声で自分の考えを公言します。そして、それらに嘘偽りうそいつわがないよう、実践で裏打ちしていきます。

農高生だった時と同じ題で、同じ枚数の作文を書きます。ただ、それはある意味、ちよつと悲しいことです。六二歳にもなつてから、『こんな仕事に一生を捧げたい』では、いくぶん残念です。世間では、すでに一生の仕事を成し遂げ、名を上げて財を築いている人もたくさんいる年齢なのです。

今の私には、公の役職は何もありません。昨年、年番の班長で、市役所の配布物を両隣に届けたくらいです。蓄財など論外です。じいさんの時代からのあばら家に住み、発泡酒の晩酌を楽しみにしている生活です。

正直、私自身が未来を語るには、臺とうが立つてしまいました。というのか、老いてしまいました。辞書は拡大鏡が必要です。噛める奥歯は左右ともありません。毎朝、三種類四錠の薬を飲みます。それでも、未来を語れると信じています。健康寿命まで、まだ八年もあります。社会や財産にしがらみがない分、動きやすい気もしています。

四五年ぶりに、農業について作文を書きます。農政問題を論じて、あるべき姿など訴えたり

しません。ひたすら、自分が農家として生き残る道を書きます。書いた内容が、農家のおじさんの一般論だとか、どつかで聞いた考えだとか、辛辣な批評をお願いします。大丈夫です。ペロリと舌を出して逃げだす術は心得ています。

軽トラックを発進させました。

年を重ねるにつれて、親近感を抱く言葉があります。もう栄達など諦めてしまった反動なのでしょうか。『民草』もその一つです。ニユアンス的に、下々の者、という上から目線があるのが、相変わらずしやくに障ります。でも、エネルギーシユな、市井の人々、という響きが、強く伝わってくるようになりました。したたかな底力も、じんじん感じられます。

横手盆地で農を繼ぐということは、歴史に名など残さなくとも、ここで胸を張って土を耕し、静かに土塊に還る生き様を言います。『民草』になるという意味です。

『民草』の本来本元なら稲です。品種名の括りはあっても、一株一株に名前などありません。土に根を張り、懸命に米を稔らせて、やがては、枯れて土に還るのです。私も稲も同類です。なんか心強い気がします。

フロントガラスに、東の山並み。紺青の濃淡で凜とした稜線を描きます。出穂を間近にして、生命が大きく躍動する横手盆地。私はここに居ます。横手盆地と稲作——これからも、私の全

てです。

真つ直ぐに、家に戻ります。すつと背を伸ばして、パソコンのキーをたたきます。ご一読いただければ幸いです。

\*

こんな仕事に一生を捧げたい

私は横手市に住む六二歳の農家です。現在、妻と一緒に、米作りをしながら、農産加工を生業にしています。加工は足かけ一七年になります。

自家産のもち米を使った赤飯やおやきを、地元の農産物直売所やスーパーで販売しています。豆餅や笹巻きなどの伝統食品も、レパートリーの内です。祝いの赤飯を炊き、喜びの餅について、惣のお茶請けにおやきを焼きます。農村の慶事や団らんを彩るビジネスには、心が弾みます。

農業経営の基本理念を、緩やかな自己完結に置いています。多くの食品製造業は、農家の家

業から分化したものです。味噌・醤油しかり、納豆や豆腐、漬物などもそうです。私はその原点に戻って、全ての加工品の主原材料を、自分の田んぼで作ったもち米にしています。赤飯用のササゲ豆も、豆餅の黒大豆も自家生産です。

原材料の生産だけでなく、販売も自ら手掛けてきました。商談会でプレゼンをしたり、飛び込み営業をしたりして、販路を拡大してきました。商品開発はむろん、衛生管理やクレーム対策なども自前です。

今、農業の六次産業化が花盛りです。一次（生産）の農業を、二次（加工）と三次（販売）産業と融合（一×二×三＝六）させて、農産物の付加価値を高めようとする企てです。分化していった食品を農家サイドに戻し、所得を上げていくことには賛成です。

ただし、鉄則があります。いくら各分野のプロや行政から助言や支援を受けても、主導権は自分が握っていくことです。自分で動くしかありません。返品が多くなっても、コストがかさんでも、生産から販売まで自己完結を貫いていれば、どこかに改善の糸口がみつかります。そこをこじ開ける原動力が、日常の情報収集と購入者意識の尊重に他なりません。決してぶれてはいけない、経営の基軸だと思っています。

お陰様で、農産加工は順調です。ただ、これから規模拡大して、加工部門を独立させる考え



はありません。あくまでも、米農家の家業の一環として位置付けていきたいのです。米が安くなっても、米作りをずっと続けていけるように、米加工を農業経営の中心に据えていきます。

これからやってみたいことが、一つあります。なんとか頑張って作っていきたい田んぼに、木道もくどうを渡すことです。短くていいのです。稲の植わった田んぼの上に立ってみたいです。

稲が葉を茂らす頃、両手を広げて青田を渡る風を真正面で受け止めます。稲の穂が出る真夏の昼下がり、しゃがんで地味な花に目を凝らします。見渡す限りの出来秋できあき、夕日に染まる天と地の狭間で、自然の恵みに深く頭を下げます。稲株が初雪の綿帽子をかぶった朝、両手の器で包んだ熱いコーヒーを飲みます。

そうやって、私は横手盆地の稲と同化します。

横手盆地で農を継ぐ

「最優秀賞」受賞者のことば

本音で書くということ

この度は、私の拙い<sup>つたな</sup>作文を温かく包んでいただきまして、ありがとうございます。これから大きく成長する本文学賞の、礎<sup>いしずえ</sup>の一塊になったことを光榮に思っています。

学生の頃から、小説を書いてきました。若い時分には、小さな賞をいただいたこともあります。でも、この頃は、とんといけません。応募した原稿はあらかた梨<sup>なし</sup>の礫<sup>つぶて</sup>です。還暦も過ぎたし、もう面倒な虚構づくりはやめて、本音で好き勝手に書くことにしました。

本音で書く——格好の良い言葉です。でも、これが曲者<sup>くせもの</sup>でした。今日の本音が、翌日には薄っぺらになって色褪<sup>あ</sup>せてしまいます。一段底



表彰式での鈴木さん

鈴木良

の本音が見えてきます。勇気を出してそこに降りてみると、また更なる深層が見下ろせるのです。文章を編むことの、終わりになき定めなのでしょうか。ともあれ、ここまでの本音だと、定規で太い実線を引いて書いた次第です。

今、横手盆地には刈田が広がっています。また一重、稲作りの年輪が加わりました。多くの農家の様々な思いが、染み込んだ一本です。ただ、今年の大地上は、いつになく騒がしいのです。TPP大筋合意を受け、日本農業の存亡について百家争鳴ひゃっかそうめいの状態です。

さて、私はどうしましょう。むしろ旗はたを掲げて、批判の拳を突き上げましょうか。それとも、愚直ぐちよくに野良仕事に励み、稲との対話に埋没まいもくしましょうか。本音の深淵では色々な思いが渦巻いています。

いずれにしろ、そんな喧騒けんそうを一笑して、横手盆地はまもなく根雪の下に眠るのです。

第2回ふるさと秋田文学賞優秀作品

みちのく鬼譚<sup>きたん</sup>

森  
川  
瑠美子・作

み  
ち  
の  
く  
鬼  
譚



「泣く子はいねがー！」

会場に現れたなまはげが怒鳴ると、親に抱かれた小さな子どもたちから、ワッと悲鳴が上がった。

「なまけものはいねがー！」

子どもたちの悲鳴が高くなっても、なまはげたちは容赦ようしやしない。叫ぶ子どもたちの前へ進んで、さらに怒鳴り声を上げる。

翔也しょうやも、まわりのなまはげたちを真似て、怒鳴り声を上げたが、「いねがー！」の部分の発音がうまく言えそうになかったから、ただ「ワオォー！」と怒鳴るだけに留めた。秋田の言葉は思ったより難しい。自分の平坦な発音では、なまはげの恐ろしさは表現できないと思う。

それでも、稲藁いなわらでできたケダシと呼ばれる蓑みののような上着を着て、赤い鬼の顔のお面を付けて動き回ると、子どもたちは期待通りの反応を示してくれた。母親の胸に顔を埋めて泣き出す子もいれば、小学生に上がったくらいの子どもの一人は、「もう、夜にはゲームをしません！」と、真剣な面持ちで誓ってくれる。

ここは、銀座のデパートの八階にある催し物会場。今日は秋田県の物産展のイベントの一つとして、なまはげによるショーが開かれている。きりたんぼ鍋のセットや曲げわっぱの盆が展

示販売される中に、なまはげが登場して雰囲気盛り上げようという趣向だ。

なまはげには、地元秋田県男鹿市<sup>おがし</sup>からやって来た町の男たちが扮している。地元では何度もなまはげに扮したことのある経験者ばかりで、恐ろしげな歩き方も、子どもの脅し方もうまいものだ。それに比べて、一人、いや一匹、動きのぎこちないなまはげがいた。翔也が扮するなまはげだ。

「バイト、やんない？」

大学で同じ学部の串川から電話がかかってきたのは、昨日昼飯を食べたすぐあとだった。明日を大晦日に控えて、世間では何かと忙しい年の瀬だろうが、大学一年生で家庭教師のアルバイトがキャンセルになった翔也は、退屈な冬休み的一天を持て余していたところだった。

「お前、明日暇だろ？」

串川の要件は、急用のためにできなくなったアルバイトを代わってくれというものだった。

串川は秋田県出身で、田舎<sup>いなか</sup>の知り合いからこのアルバイトを頼まれたらしい。

ちようど小遣いが底をつきかけていたから、アルバイトの誘いは有難かったが、内容を聞いて二の足を踏んだ。デパートの物産展のイベントで、なまはげに扮<sup>ふん</sup>するのだという。

「着ぐるみモノ？」



翔也の反応に、串川の声は尖った。

「なまはげを着ぐるみといっしょにすんなよ。ゆるキャラじゃないんだからさ」

「おんなじだよ。なまはげの衣装着るんでしょ」

断るつもりだったが、時給を聞いて、食指が動いた。ちょっとした肉体労働と同じぐらいの報酬がある。

「でも、おれ、なまはげのこと、なんにも知らないよ」

そう言うってから、父親の故郷が秋田であったことを思い出した。といっても、父親とは、五歳のとき以来会っていない。両親が離婚して、翔也は母親に引きとられた。父は生活面で問題の多かった人のようで、その後家族とは絶縁状態になり、今はどこにいるのかもわからない。故郷の親類にも見放されたと母は言っていたから、秋田にもいないだろう。

中学生のとき、父を探すために短い家出をしてしまったことがある。そのときの祖父母の悲しみや、父の分まで愛情を注いでくれた母の嘆きを見て、もう父のことは忘れようと思った。あれから、自分の父親は事故で死んだと思っている。

「そんなに真面目に考えるなよ」

黙った翔也を、串川は迷っていると思ったようだ。

「だいじょうぶ。ほかのなまはげといっしょに騒いでればいい。誰も本物だとは思ってないんだからさ」

それならと、翔也は引き受けることにした。引き受けるにあたって、少しはなまはげについての知識を得ようと、串川に訊いてみたが、串川はほとんど他県の人間と同じ程度の知識しかなかった。結局、スマホでなまはげの動画を見て予習をしていくことになった。

翔也が見た動画のなまはげも、この会場のなまはげと同じセリフを怒鳴っていた。だが、動画を真似て昨夜練習したセリフと、実際会場でなまはげが発する言葉は微妙に違った。やはり、生で聴くのは迫力がある。

イベントは、午前と午後の一回ずつ。二度目は一度目よりも、翔也は迫力あるなまはげを演じられたと思う。やっぱり「いねがー！」とは言えなかったけれど。

二回の出場が終わり、会場の裏手のパーティションで仕切られた部屋で、翔也は衣装を脱いだ。迫力ある演技を見せた男たちも、それぞれ衣装を脱ぎ、鬼のお面を脱ぐと、優しいおじさんの顔になった。

なかでも佐山さんは、格別に笑顔の穏やかな人だった。なまはげに扮したときとは打って変わって、静かな声で話をする。東京で長く暮らし、最近地元に戻ったということで、標準語で話をしてくれるのも有難かった。今回のなまはげグループのリーダーを務める人で、地元の寺の住職ということだった。

アルバイト代を貰い、着替えを済ませ帰ろうとすると、佐山さんから、打ち上げの宴会の誘いを受けた。宴会といってもその後一行はすぐに男鹿に戻るため、デパートの近くにある秋田料理の店で、軽く食事をするだけだという。

ちようどお腹が減っていたことでもあるし、参加を決めた翔也は、佐山たちといっしょに、なまはげの衣装を入れた段ボール箱を、デパートの搬出口まで運ぶのを手伝うことにした。段ボールは四個口となり、搬出口で待っていた六人乗りのバンに積まれた。佐山さんたちは、そのバンに乗って秋田まで帰るのだという。

デパートを出ることになったとき、翔也は衣装を脱いだ部屋に忘れ物をしたことに気づいた。今日の手荷物は小ぶりのリュックサックだけだったが、その中に、入れたはずのハンドタオルがなかったのだ。翔也は遅れて店に行くことにした。

着替えをした部屋は、すでにパーティションが取り払われ、がらんとした会議室のようになっ

ていた。Pタイルの床のあちこちに、なまはげの衣装から落ちた稲藁が散っている。ドアの向こうから、デパートの店内放送や客のざわめきが聞こえてきた。物産展はデパートの終業時間まで行われるから、まだまだ客足は衰えていないのだろう。

ハンドタオルは、壁に沿って並べられたパイプ椅子の一つに掛けてあった。誰かが拾ってくれたらしい。ハンドタオルをつまみ上げて、リュックサックに入れようとしたとき、部屋の隅で人の動く気配がした。窓の下あたりだ。冬の薄い陽の光が、床にたよりなく当たっている。

「ワッ！」

思わず翔也はのけぞり、リュックサックを落としてしまった。人がしゃがみこんでいる。いや、人じゃない。なまはげだ。

「びっくりさせないでくださいよー！」

相手は立ち上がって、翔也に体を向けた。青いお面をかぶったままだ。どうやらまだ一人残っていたらしい。

「もう、みなさん、打ち上げのお店に向かっちゃいましたよ」

彼も宴会に行くはずだ。翔也はお面の向こうにあるはずの、人間の目に向かって言った。

「……」

「え？　なんですか？」

そういえば。翔也はこのなまはげのことを思い出した。イベントの最中、とりわけ大きな声を張り上げ、子供を無闇に怖がらせていたなまはげがいた。ほかのなまはげから、やりすぎだと小声で注意されたのも見たし、デパートの物産展係の店員の誘導にも素直に従っていなかった。

チームで行動するのが苦手なんだな。そのときはそう思ったが、いつまでもこんなところに残っているなんて、いくらなんでも身勝手すぎやしないか。

「いっしょに向かいましょう。店の場所は聞いてますから」

だが、なまはげは嫌々とするように首を振って見せ、そして唸りながら、顔を斜め上に向けてみせた。見ると、後ろの髪の毛が、壁に取り付けられている棚の柱にからまっている。どうやら、それが取れなくて、みんなに遅れてしまったらしい。

すぐさま、翔也はからまった髪の毛をほどいてやった。お面を取ればいいのと思ったが、追求はしなかった。佐山さんたちの言うことすら素直にきかなかった男だ。自分の言葉に耳を傾けるはずがない。

部屋を出ると、シャリシャリと稲藁のこすれる音をさせて、男は翔也の後ろを歩いてきた。

エレベーターに向かう廊下で、ときおり制服を着たデパートの店員たちとすれ違ったが、誰も翔也たちに目を止めない。今日物産展のイベントがあることを、デパートの従業員たちは知っているのだ。

だが、突然こんなモノが現れたら驚かされるだろう。案の定、エレベーターを待っていると、中から出てきた店員の若い女の子に、キャットと呼ばれてしまった。

翔也は男を振り返った。

「その格好のままっていうのはまずいですよ。お店はすぐ近くらしいけど、通りを歩くんですよ」

男の返事はなかった。天井に届きそうな頭を真つすぐ前に向け、肩で息をしている。翔也はあきらめて、点滅しながら下がっていくエレベーターの鉤を見つめた。

従業員用のエレベーターのすぐ先が、デパートの出口になっていた。出口の手前にある警備員の部屋からは、なんの咎めも受けなかった。彼らも物産展のイベントの出場者が、衣装を着たまま出ていくと思ったのだろう。イベントの出場者の中には、そんな人もめずらしくないかもしれない。

表に出ると、空はよく晴れていた。ビル風が冷たい。ダウンジャケットの前を合わせ、翔也

は佐山さんに聞いた道順を思い出しながら、目印となる建物を探した。渋谷や新宿なら道はわかってるが、銀座はよく知らない。

「靴屋の隣を右だつて聞いたんだけどな」

大通りの人の出は多かった。明日は大晦日という午後は、歩く人の姿もどこか浮き足だつて見える。

婦人靴の店が角にある道を折れるように言われたが、それらしき店は見当たらない。

「やばいな。わかんないよ」

翔也は顔を上げて周りの建物を見渡した。銀座は、飲食店の看板ばかりが目をはひく。そのとき、前から歩いてきた学生のかしき一団の中から、声が上った。

「なまはげだぞ！」

「でっけえなあ、やっぱり」

そう言いながら、一団の一人がポケットからスマホを取り出す。写真を撮るつもりらしい。

「すげえ。本物？」

笑える。なまはげに本物も何もない。中身は人間に決まっているんだから。

「いいですか？ いっしょに」

一団の中の女の子が声を上げ、仲間らしき男たちも「俺も入れて」と寄ってきた。翔也は立ち止まって、彼らが写真を撮り終えるのを待とうと思った。めずらしいものを見かけて写真を撮りたい気持ちは、よくわかる。

ところが、スマホを向けたときだ。なまはげに扮した男が、唸り声を上げた。

「ウオオオオ！」

それは、まるで地の底から響いてくるかのような深く重い声だった。女の子は驚いて立ちすくみ、周りの仲間の男たちも言葉をなくした。

翔也は反射的になまはげに扮した男の手を引っ張って駆け出した。幾人もの見知らぬ肩にぶつかりながら、翔也はとにかくその場を離れるために走った。

大通りを避けて、脇の路地に入った。どこかの店の裏側のように、そこだけひっそりとした空間になっている。

「一体、どうしたんですか？」

「……」

男は突っ立っているが、表情はわからない。青いお面はこちらを睨んだままだ。

「もうイベントは終わってるんですよ。あんなふうに通行人を脅すなんて……」



こんなことなら、ハンドタオルなど取りに行かないで、佐山さんたちといっしょに店へ向かえばよかったと思う。

「いつまでもそんな格好をしてるのって、おかしいですよ」  
すると男は、ウウウと唸ってから、言った。

「おめ、どさ行ぐ」

何を言われたのかわからなかった。すると男は、ふたたび同じ言葉を繰り返した。二度聞くと、なんとなく言わんとすることが伝わってくる。

「どこへ行くかってことですか？」

男は深く頷く。

「イベントの打ち上げの店に向かってるんですよ。佐山さんたちが待ってるから」

男は即座に首を横に振った。

「山にいねば、なんね。わらしだば、おじよかへねばな」

「はっ？」

山とわらしの言葉の意味はわかった。いねばというのは、行かなければならないという意味だろう。佐山さんたちが話していたことを思い出した。今夜、彼らは男鹿の町に戻って、ふた

たびなまはげに扮するという。男鹿おのみぞかの大晦日には、必ず行われる行事らしい。

男は今夜、子どもたちを脅かさなければならぬと言っているのだろう。

「わかりました。とにかく佐山さんたちと合流しましょう」

早くこの奇妙な男を、佐山さんに返したい。翔也は強く思った。ところが、男は大きな体を揺すって首を横に振る。

「山にいねば、なんね」

「そんなこと言われたって……」

辺りを見渡した。道はすっかりわからなくなってしまった。佐山さんの携帯電話の番号を知らないことが悔やまれる。店の名前もうろ覚えだ。もう、合流することは諦めるしかない。だが、この男をどうするか。

「山にいねば、なんね」

声は懇願する調子に変わっている。

「男鹿に戻るっていうんですね？　これから、すぐ」

男は深く頷いて、そして鬼の顔で翔也を見下ろした。

東京駅は帰省客でごった返していた。今日は一年で一番東京駅が混雑する日に違いない。

大きな荷物を持った人々が右往左往する中で、翔也の後ろを歩く男は異彩を放っていた。銀座と違って、ここでは誰もが先を急いでいるためか立ち止まる人はいなかったが、着ぐるみを着たまま新幹線に乗りとうとする人間はめずらしいに違いない。

その上、男は人の多さに圧倒されたのか、東京駅に着いてから、ずっと翔也の腕を離さないのだ。すれ違う人は、翔也のことも奇妙な目で眺めていることだろう。

「あそこが切符売り場ですよ。満席でしょうから乗れる新幹線に飛び乗ったほうがいいでしょう」

翔也が切符売り場を指差しても、男は顔を向けようとしなかった。ただ翔也の腕を強く掴んで突っ立っている。

「早く切符を買わないと乗れなくなっちゃいますよ」

すると、男は、「ウウウ」と唸ってから翔也を掴んだ手に力を込めた。

「おめ、どさ行く」

「どこ行かつて――、帰ります」

男は激しく頭を振った。

「おめも、行くべ」

「無理ですよ。僕、秋田になんの用もないんだから」

そう言いながら、心に少し引つかかるものがあつた。なまはげに扮するアルバイトを引き受けたのは、本当に小遣い稼ぎのためだけだったのだろうか。もしかすると、自分でも知らないうちに、父親の故郷だという秋田への郷愁があつたのじゃないか。

いや、そんなことはない。

翔也は自分の気持ちを否定した。

父のことは、中学のときに自分なりに答を出した。しかもあのプチ家出のとき、翔也には母が言つた言葉が忘れられない。

「お父さんは子どもを可愛がらない人だったのよ。翔ちゃんなんか、抱かれたことなんてないかもしれない」

母はそう言つたが、父に抱かれた記憶はなくはない。だが、その記憶には、何か得体の知れない恐ろしさがつきまとう。

身勝手な男だったのだろう。そんな男にいつまでも未練を持っている自分を認めたくない。

翔也は新年を迎える自分の家を思い浮かべた。今日まで仕事に出ている母は、例年のごとく買っ

てきたおせち料理を、夜になってあたふたと食卓に並べるだろう。それは構わない。どうせおせち料理の中に食べたい物などないのだ。だが、問題は遠藤だ。

遠藤というのは、もう長いこと母と付き合っている男で、籍は入れていないが、家族の一員といってもいい人間だ。週末しか家には来ないが、年末年始は必ず我が家で過ごす。祖父母が亡くなってから、母と息子だけの年末年始はさびしいと思っているようだ。

遠藤は気持ちの優しい男で、翔也は嫌いじゃなかった。だが、やはり父親の代わりだとは思えない。遠藤は母の相手であつて、遠藤が来ると、母と自分の間の空気が微妙に変わる。もう、来ているだろうか。

翔也は腕時計を見た。

三時五分前。そろそろ来る頃だ。

「男鹿の山に、おめも、行くべ」

行ってみようか。

男を見上げ、翔也は思った。この奇妙な男と遠くへ行ってみるのもおもしろいかもしれない。母親には友達といっしょに旅行に出ると言えがいい。案外、遠藤と二人だけの正月を楽しむかもしれない。

財布には、貰ったアルバイト代があるから、旅費には困らなかった。男鹿まで行って、その後どこかを回って帰って来よう。

「わかりました。僕も行きますよ」

翔也の返事に、こちらを見下ろす青いお面がほんの少し笑ったような気がした。

秋田へ向かう新幹線は、東京のラッシュ時のような混雑ぶりだった。乗車率は二百パーセントで、座席を確保することは叶わず、トイレ前の通路に押し込められる形で乗車することになった。

「もう少しつめていただけですか？」

後ろから誰かに言われて振り向くと、なまはげに扮したままの男が、二人分ほどの幅を取って仁王立ちしていた。翔也は思いきり男の腕を引っ張って、自分の脇へ引き寄せた。

誰かがさりげなく自分たちを見ているのを感じた。こんな混んだ電車の中で、稲藁いなわらの衣装は嵩張かさばって迷惑だ。

仙台で人が降り、車内はずいぶんと風通しが良くなった。通路に立っている人の姿もまばら

になり、窓の外の風景を見ることができた。雪が降っていた。粉雪だ。

ふいに、窓の外を流れていく風景を、遠い昔見たように思った。具体的には何も覚えていないが、雪の舞うさびしい景色に懐かしさを感じる。

そう思ったとき、通路の先で、「やだよお」と気弱な声が上がった。顔をそちらに向けると、高校生らしき五人ほどのグループがいるのが見えた。それぞれ足元に大きなリュックサックを置いている。話し言葉が標準語だった。学校行事か何かで、関東から東北へ旅行の最中なのだろう。

「罰ゲームだからな。飲めよな」

一人の少年が声高に言って、周りの少年たちもはやし立てた。それぞれが手に、缶ジュースを持っている。それを順番に、真ん中に立つ少年に飲ませているのだ。ふざけているのだろうが、飲まされている少年は、真剣な目をして嫌がっている。

いじめだな。翔也は顔を窓に戻した。よくあることだ。

が、次の瞬間、少年の「ワアアー」という叫び声に、翔也はふたたび少年たちを振り返った。

なまはげに扮した男が、少年の一人をつまみ上げていた。首の後ろをつままれた少年は、床から十センチほど足が浮いている。

「ウオオオオ」

唸り声を上げた男は、真ん中に立っていた少年からジュースを取り上げ、床に投げた。そして少年をつまんだまま、藁沓わらぐつの足を上げて、ドスンドスンと四股しこを踏む。

「やめろ！ やめるんだ！」

翔也は男にしがみつき、叫んだ。だが、男は唸り声を上げたまま、空いた方の手で、いじめていた別の少年をつまみあげた。どうやらいじめをした少年たちを懲らしめたいようだ。

「わかった。わかったからから、離してやれ」

それにしても凄まじい力だ。少年といっても、彼らはすでに一七〇センチ近い身長がある。そんな相手をつまみ上げてしまうとは。

どうにか翔也が男の腕から少年を引き剥がすと、震えていた少年たちはあたふたと荷物を担ぎ、車両を移ってしまった。

「ウオオオ」

少年たちの背中に、男がまた叫ぶ。

翔也はうんざりした。

「いい加減にしてください。ここはイベント会場じゃないですよ」



男は叫ぶのをやめたが、また四股を踏むポーズを作ろうとする。

「だから、やめてつてば。本物のなまはげじゃあるまいし」

翔也は男の青いお面に付いている角を掴んだ。

「いつまでもこんなものを付けてるから、なまはげ気分が抜けないんですよ」  
が、お面が取れない。

「あれっ？ 変だな」

自分がなまはげに扮したときは、お面の着脱は簡単だった。だが、男のお面は固く顔に張り付いている。

「おかしいぞ、取れないはずは……」

強く角を引っ張ってみた。やはり、お面はびくともしない。

「ウオオウ」

男は情けないような声を上げた。そして大きく左右に頭を振る。

「ちよつと待つて——嘘だろ」

くしゃくしゃのまま背中に垂れている男の髪の毛を、翔也は引っ張ってみた。これも、本来なら、お面に付いている偽物だ。だが、男はふたたび情けない声で呻く。

稲藁のケダシを搔き分けてみた。自分が着たときは、中にTシャツを着た。ところが、この男は何も着ていない。土くれのような茶色い身体が覗いている。

目になっているものが、信じられなかった。

「――まさか、有り得ないよね？」

デパートのイベント会場で、一人迫力がありすぎたなまはげだった。四股を踏む姿も、子どもたちを脅す様子も、ほかのなまはげとは違っていた。

「――もしかして、本物？」

そのとき、車内放送が流れ、新幹線は角館かどだてを出たことを知らされた。翔也は窓の外を見た。雪が激しくなっていた。

秋田は吹雪ふぶきいていた。

ホームには横殴りの風が吹き、今まで経験したことのない寒さが足元から上ってくる。

翔也はダウンジャケットの襟元からフードを出してかぶり、両手に息を吐きかけた。こんなことなら手袋を持ってくればよかったと思う。

男は、いや、なまはげは、翔也の横で仁王立ちしていた。吹雪の中で見る男の姿は、東京で見たときよりずっとしつくりくる。稲藁のケダシの肩に雪が積り始めているが気にするふうもない。

やがて、闇の中から男鹿行きの列車が浮かび上がり、ホームに滑り込んできた。屋根にたっぷり雪を乗せている。

列車に乗り込む乗客の数は少なかった。四時間かけてたどり着いた秋田は、午後七時過ぎ。大晦日のこんな時間は、東京と違い、誰もが家で過ごしているのだろう。

窓際の席を選んで、翔也は坐った。なまはげも横に坐る。翔也のダウンジャケットとなまはげの稲藁がこすれて、乾いた音をさせる。

列車が動き出した。

「真っ暗だ」

翔也は窓に額を当てた。窓は冷たい。そして息ですぐに曇ってしまう。

ふと懐かしさがこみ上げてきた。ずっと昔、こんなふう窓に額を足当てたことがあったような。

列車は追分を過ぎ、出戸浜と上二田を通り越した。窓の外は暗いままで、車内を鏡のように

映し出している。翔也は眠ったふりをしながら、ときおり窓越しになまはげを見た。青い鬼の顔は、まっすぐ前を向いている。

担がれたんだ。

翔也はそう思うことにした。着替えを忘れた男が、ふざけて嘘をついたのだ。本物のなまはげがいるはずがない。小学生じゃあるまいし、そんなことが信じられるものか。

だが、隣に坐った男からは、異様な気配を感じる。人とは違う、何か、別の……。

眠ったふりをしているつもりだったが、いつのまにか翔也は本当に睡魔に襲われた。朝から慣れない着ぐるみを着て動いたせいで、疲れてしまったのだ。

そのとき、なまはげの声が聞こえてきた。

「おらはの山は、寒風山かんふうざんだべ」

そしてなまはげは、ぼつぼつと昔語をはじめた。ずっとずっと昔の、山での暮らしや里での思い出――。

なまはげの声は、唸り声などではなく、どこか懐かしい響きをとまなっている。翔也はうんうんと頷いていた。すると突然体がふわりと軽くなつて、なまはげに抱き上げられた。なまはげは翔也を抱いたまま、雪の降りしきる闇の中をずんずんと進んでいく。山を越え、川を渡り、

さびしい海岸線を進んでいく。

不思議なくらい寒くなかった。なまはげの稲藁に包まれてぬくぬくとあたたかい。

やがて町が見えてきた。もう雪がやんでいる。そして、町は眩<sup>まぶ</sup>しいほどの光に溢れ、緑に満ちていた。

「ウオオオ」

力強いなまはげの唸り声がして、翔也はぼおんと投げ出された――。

はっと翔也は起き上がった。

夢を見ていたらしい。窓の外がほの白くなっている。駅だ。男鹿駅に着いたのだ。

隣のなまはげが、驚いたように立ち上がり、出口へと向かった。

「ちょっと、待ってよ」

翔也はなまはげを追って列車を降りた。

地面から吹き上げてくる雪に足を取られながら、翔也は男鹿駅の駅舎を出た。

駅前には広場があり、外灯の光に、雪がぐるぐると回るように吹いているのが見えた。地面は

真つ白で、一台だけ停まっている車の上には、こんもりと雪の傘ができています。

広場の先に目をやると、広場から分かれた道路の両側に、シャッターが閉まった店が並んでいた。通りに人気はなく、雪だけが生き物のような迫力で舞踊っている。

通りの向こうに、数本の松明<sup>たいまつ</sup>が現れ、数人の男たちが歩いていくのが見えた。なまはげの衣装を着けた者もいる。伝統行事を行っているのだ。

翔也はうつとりとその光景を眺めた。

松明は雪の中に揺らめいて、なんとという幻想的な風景だろう。闇の中に浮かび上がる鬼の面をかぶった者たちの集団は、怪しい恐ろしさに満ちている。

「わらしだば、おじょかへねばな」

松明を指して本物のなまはげが歩き出し、翔也も雪の中に足を踏み出した。

道路は雪かきがなされているが、スニーカーでは心もとない。一歩進んで滑りそうになり、また進んで転びそうになる。

前を進む本物のなまはげの歩みは確かだった。がんじきと藁沓に守られた足元は、ザックザックと力強く雪を踏む。

通りを進み、松明が消えていった路地に入った。そこからは普通の民家が並んでいる。

松明を持った一行が、一軒の家の前で集まっていた。なまはげ三匹と関係者か、衣装を着ていない男が二人。その男の一人に、翔也は見覚えがあった。

「佐山さん！」

「あれ？ どうして、ここに？」

翔也はこれまでのいきさつを簡単に説明した。会場に残っていたなまはげがいたこと。彼にせがまれていつしよに来ることになったこと。

すると佐山さんは、顔にかかる雪を払いながら、首を傾げた。

「残っていたなまはげ？ そういえば——」

佐山さんが言うには、今朝男鹿を立つとき、町の途中で加わった者がいたという。早々と衣装を身に付けていたから、急遽参加した者だろうと思って乗せてきた。佐山さんが乗ってきた帰りの車にはいなかったが、車は二台で来ていたから、もう一台に乗っているとと思っていた。そして佐山さんは、「悪かったねえ」と、翔也をねぎらった。

「いえ。僕も本場でなまはげを見てみたかったんで」

まさか、本物のなまはげを男鹿に連れ帰るためだとは言えなかった。そんなことを言ったって信じてもらえないはずがない。

ドスンドスンと音をさせて、なまはげたちが四股を踏み始めた。家の中に入る準備が始まったのだ。

「あ、行かなきゃ」

佐山さんは家の中になまはげたちを案内するという。

「同行してもいいですか？」

「ああ、いいよ。家の人には、見学者だつて言うから」

ありがとうございますと頭を下げて、翔也はなまはげたちの後に続いた。本物はどれだろうと、目を凝らしてみたが、後ろ姿はみんな同じだ。

そのとき、一際大きな唸り声を上げたなまはげがいた。青いお面をかぶっている。

あれだ！

家の中から、なまはげの到来に気づいた子どもたちの、きゃあきゃあ騒ぐ声が聞こえてきた。

ドタドタと走り回る音も続く。

さあ、始まるぞ。

「泣く子はいねがー！」

なまはげの声に、一段と高くなった子どもたちの叫び声が響いた。



この家の子どもたちは、小学校一年生の男の子と、保育所に通っている女の子だった。

「このぐらいの年齢の子が、いちばんやりやすいんだよ」

小声で言うと、佐山さんは優しい目を子どもたちに向けた。

「ほんとに怖がってくれるからね。小学校の高学年になると、もう駄目なんですよ。偽物だつてわかってるから、脅してもへらへら笑ったりしてね」

「はあ」

翔也の返事は曖昧なものになった。ここに本物のなまはげがいることを知ったら、子どもたちはパニックを起こすんじゃないか？

「この頃じゃ、僕の子どもの頃と違ってね、子どもを脅かすのは幼児虐待だなんて言う親がいるから」

「はあ」

「でもね、それでもいいんですよ。この行事はねえ、一年の安息を願うこの男鹿の大事な行事なんだ。伝統を守って続けていかなきゃ駄目なんだよね」

わざわざ秋田までやって来た翔也を、佐山さんは伝統行事に強く関心のある青年だと思っ  
ているらしい。

なまはげたちの振る舞いが大きくなった。部屋の中をぐるぐる回り、奇声を発する。

大きな唸り声を上げて、一匹のなまはげが子どもものほうへ近寄っていった。小学生の男の子のほうだ。母親に抱かれた妹とはちがい、少年は気丈にも父親の横で正座したまま真つすぐ前を見ている。

「なまけものはいねがー！」

なまはげが少年の前で出刃包丁を振るった。迫力たつぷりだ。あれは本物のなまはげにちがいない。翔也は息をのんだ。

少年の表情はひきつって、大きく見開いた目からは、今にも涙が溢れそうだ。それでも、口元を固く結び、懸命に堪えている。

翔也は思わず子どもを脅す本物のなまはげに近づいていった。

「ちよつと、ちよつと来て」

思いきり力を込めて引つ張り、そのまま廊下へ連れ出す。

「まずいですよ、本気で脅しちゃ。脅すポーズだけにしないと——」

こちらの言っていることがわかるのかわからないのか、なまはげは「ウウツ」と唸る。

「相手は子どもなんです。本気で怯えてトラウマにでもなったら——」

そう。もしそんなことになったら、なまはげの行事はなくなってしまうかもしれない。佐山さんたちが、苦勞して残そうとしている伝統行事なのに。

「ほかのなまはげと同じように振舞ってください」

本物のなまはげはふたたび「ウウウ」と唸る。

「いいですね、ポーズだけですよ」

だが、本物のなまはげは、少年の前に戻ると、ふたたび凄まじい迫力で脅しを始めた。周りの大人たちも息をのむ。

駄目だ、やっぱり本物は手加減なんかできない。

ふたたび止めに入ろうとして、翔也は佐山さんに腕を掴まれた。

「あれが、大事なんだな」

佐山さんは、本物のなまはげが脅している親子を見ている。

「ああしてね、親にすがって泣いたことを、子どもは一生忘れないでしょう。恐ろしいなまはげの記憶といっしょに、あったかい親の胸も忘れないんだ」

本物のなまはげの前で、とうとう我慢しきれなくなった少年は、父親の胸に顔を埋めていた。

小さな少年の頭は、大きな父親の腕にすっぽりくるまれている。

ふいに、記憶のかけらが合わさった。何かおそろしい気持ち。そして父親の胸に顔を埋めている自分…。

あれは、このときの記憶だったのだ。

恐ろしかったのは、父親じゃない。なまはげだったのだ。その恐ろしいなまはげから、父は僕を守ってくれた……。

子どもたちの泣き声とともに、なまはげたちは家を出た。翔也も佐山さんといっしょに雪中に出た。

泣いている顔を見られなくて、翔也は「わあ、すごい雪だ」と、ダウンジャケットのフードをかぶった。実際雪は一段と激しくなっていた。だが、不思議だ。こんなに雪があたたかく感じられる。

そのとき、なまはげに扮していた一人が、声を上げた。

「どさ行く?」

通りのずつと先を、一人、いや、一匹のなまはげが去っていく。

翔也は佐山さんを振り返った。

「あの道の先は、どこへ行けるんですか?」

「寒風山だけど」

佐山さんは首を傾げる。

「まさか、山へ行くんじゃないでしょう」

いいや。山へ帰ったんだ。おらほの山へ。

雪の中に、本物のなまはげはだんだん小さくなり、やがて見えなくなった。

みちのく鬼譚

「優秀賞」受賞者のことば

男鹿からの声

日本人なら、誰もが知っている秋田のなまはげ。私も子どもの頃から、テレビや雑誌でその姿を怖さ半分興味深々で見っていたものでした。恐ろしい鬼の顔、子どもを威嚇する太い声、揺れる松明。雪の降り積もった北の里で、鬼たちが一年に一度暴れる・・・。

あの鬼たちはどこから来てどこへ帰っていくのだろう。子どもの頃には不思議に思っていたものの、成長するにしたがって、あの鬼には村の大人が扮しているということがわかってきました。そして、伝統行事として守られ受け継がれていることも、すんなりと納得できるようになりました。



表彰式での森川さん

森  
川  
瑠  
美  
子

けれども、なまはげの映像をテレビなどで眺めるたび、いいようのない懐かしさが、大人になっても感じてしまう怖さといっしょに湧き上がってくるのです。この懐かしさはなんだろう。懐かしさは、あたたかみと少し似ています。どうしてなんだろう。

こんな思いで書いたのが、今回の作品でした。私は秋田とは縁もゆかりもない人間ですが、なまはげには、他県の者も惹きつける何かがある。

今回光栄にも優秀賞をいただき、男鹿おがの町へ旅することができました。静かな町を一人歩いていると、どこからか、なまはげたちの声が聞こえるような気がしました。もちろん、それは風の音でしょう。けれども耳を澄ませれば、失くしてはならないもの、忘れてはならないものの声が聞こえてくるのです。その声は、慌ただしく過ぎていく年月の中に生きる私の耳に、これからもずっと響き続けるでしょう。



第2回ふるさと秋田文学賞優秀作品

いつか、夏が終わる前に

渡部 麻実・作

いつか、  
夏が終わる前に



東京では連日35度越えの猛暑だというのに、秋田駅のホームに降り立つと外気温計は28度を指していた。普段、職場で設定しているクーラーの温度だ。しかしねっとり絡みつくような湿度は涼しさを感じさせることはなく、不快感だけを肌の上に塗りしていく。新幹線の中に誰かが置いていった新聞紙の天気欄では、晴れマークで表されていたはずの空模様はびっしりと厚く白い雲で覆われていて、思わず大きなため息がこぼれる。ああ、そうだった。この街はいつも白い雲に覆い隠され、薄暗く、街ゆく人の表情もどこか明るさにかけていて、平気で人の足をひっぱったり、噂話を嬉々として語り合う。それをどれほど憎んでここを出て行ったのかを、私はいつも忘れてしまう。そうしてこの空気と空の色を見てから思い出すのだ。いつもならここで駅の窓口に行き、帰りの切符を何日か早いものに換えてもらい、形ばかりの帰省と親孝行をこなせば元の生活に戻ることができた。でも今回はそれができない。私は大きくなりかけた腹をひとなでして、改札口へと向かった。今までと違い、帰りのチケットはもっていないのだから。

公務員になるように。

十年前、それが両親が私を東京の大学に進学させるただ一つの、そして絶対的な条件だった。

銀行員の父と、短大を卒業して一度も就職することなく専業主婦になった母。二人にとって自分の子供たちは清く正しく、頭が良くて、誰にでも自慢できるような存在でなければならなかった。私は彼らの見栄のために自分の学力よりかなり上の進学校を受けることを強要され、受験勉強のハードさとプレッシャーから中学三年の一年間で5キロも体重を落とした。もやしのように細くひよろひよろとした体に、青白く血色の悪い顔をした私は、高校に入学してからも授業についていくことがままならず、かなり苦労した。私が三年生になった年に弟が一年生として入学してくると、教師は

「お前たちは顔はそうでもねえのに、体つきはひとつ（同じ）だなや」

と笑った。弟は幼いころから私よりも出来は良かったが、それでも実力以上に無理をして入学したことは、年頃の男としてはまったく筋肉のないガリガリの体格からも明らかだった。

二人が同じ制服に腕を通すようになると、家族でどこかへ出かけるときは必ずそれを着ていくようにと両親に言われた。たとえば親戚の葬式の控室で、振る舞い酒で顔を赤くした父が私たち二人を呼び付ける。そうして誰かれ構わず

「これ、どこの制服かわかるべ。そうそう、あの県下イチの進学校の。いやあ、おれに似ず、なかなか頭のいい子たちなんだや」

と私たちの自慢話をする。その横で曖昧な笑みを浮かべて話が終わるまで姿勢正しく立ち続けることが、私たち姉弟に課せられた役割であり、存在意義だった。あの頃は両親にとって一番幸せな時期だったのかもしれない。夫婦仲がいいとは言えなかった二人にとって、唯一同じ目標が子育ての成功であり、そのわかりやすい例が『偏差値の高い学校に入学するかしい子供たち』だった。彼らは自信に満ちあふれていた。それと同時に、私たち姉弟としては一番不幸な時期だった。親は私たち自身を見てはいない。その向こう側にある、自分たちの評価を見ていたのだと思い知らされるのだから。

このままここにいれば、就職先も交際相手も、その先の結婚相手すら口を出されるだろう。そう思った私は、なによりも一番家に居なければいけないと考えるようになった。そのためには、どうしても家からは通えない距離にある大学に進学しなければいけない。私は両親に「東京の大学に行つて、広い世界で学びたい」ともっともらしい理由をつけて、進学先の候補を書いた紙をおずおずと差し出した。父は老眼鏡をかけ、眉間みけんに皺しわをよせながらそれを見ると「俺は高校出たらすぐ行員になって、ここまで自分の力できた。だから大学のことはよくわかんね。でもお前が行きたいなら、行けばいい。ただし、じえんこ出す親としてひとつだけ条件つける。卒業したら、公務員になれ」

と言った。母は父の言葉に黙ってうなずきただけだった。私は父に見えないように唇をかみしめて

「わかった」

と答えた。庭先でカエルがゲコゲコとひととき大きな声で鳴いた。それを合図にするかのように、母は無言で台所へと立った。私も何も言わずに、二階の自室へと上がった。

それから私は、高校受験の時以上に勉強し、東京の大学に合格した。父は国立大学の教育学部ということになにもケチをつけることがなかったようで、すんなりと家を出してくれた。東京行きの深夜バス乗り場には母しか来なかった。

「お父さんは明日も早いから、ね」

母は言い訳するようにそういうと、私の手に小さな紙袋を持たせた。バスに乗り込んでから開けてみると、そこには母お手製のおにぎりが二つとペットボトルのお茶、そして一万円札が入ったぽち袋があった。私はトイレ休憩に止まった途中のサービスエリアで、一万円札だけを抜き取って財布に入れると、あとはそのままゴミ袋に投げ捨てた。どんな郷愁の念もなかった。ただ、やっと解放されたのだという喜びに大きく腕を伸ばして深夜の空気を吸い込む。すると駐車場に止まっていたいくつものトラックのテールランプがキラキラと乱反射して、まるで私を祝福

しているように見えた。

それから大学三年の夏まで、私は一回も秋田に帰ることはなかった。父も母も『勉強』『単位』という言葉さえ出しておけば、無理に帰省を勧めることはなかった。三年の夏に帰ろうと思ったのは、その当時付き合っていた恋人が竿灯かんとうを見たいと言ったからだ。一学年上の彼は、私にとって初めてのボーイフレンドだった。

「だって、東北三大祭りなんでしょう。俺って東京生まれで、両親もそうだから特に田舎ってないんだ。だから憧れるんだよね。夏休みに実家に帰るとか。そこでそんな有名な祭りをやってるなんて、莉子ちゃんがうらやましいなあ。来年からは社会人だから夏休みがとれるかもわからないし、莉子ちゃんの両親にもご挨拶したいし、行こうよ。一緒に連れて行ってよ」

悟はくったくのない笑顔でそう言った。私はこっちに出てきてから一度も帰ったことがないこと、三大祭りとは言ってもたいして見るべきものではないということは何度か説明したけれど、彼は

「帰ってないならなおさら帰らなきゃ。ご両親も喜ぶよ、きつと。それに竿灯がたいしたことないかどうかは俺が決めることでしょ。東京の人間が東京タワーには登らないってのと同じ

で、莉子ちゃんは秋田の人だからたいしたことないって思うかもしれないけど、全国から人が集まる祭りだよ。莉子ちゃんがいなかったら一生行くこともないかもしれないし、ガイド、頼むよ」

と聞く耳をもたなかった。

私は彼の勢いに押されて、しぶしぶ秋田行きの手配すると母親に電話した。

「来月の祭りの時、二日間だけ帰ることにしたから」

帰る、という私の言葉に母の声は少し浮き足立ったように聞こえた。

「あら、そう」

しかし、次の私の台詞に、彼女の周りの空気までが固くこわばるのを感じる。

「彼氏も連れて行く。うちには泊まらないけど」

「彼氏？」

それ以上の詮索<sup>せんさく</sup>を避けるために、私は「じゃあ、これからバイトだから」と早々に電話を切った。手の平が、まるで受話器の向こう側から流れてきたじめじめとした空気に触れたかのようにじっとり濡<sup>ぬ</sup>れていた。私はそれをスカートの端で強くぬぐった。

三年ぶりに実家に足を踏み入れると、以前は感じなかったカビ臭さが鼻につく。弟も春から



仙台の大学へと進学し、いまは父と母しか住んでいないこの家は子供がいる家特有の雑然とした雰囲気から解放されて、ゆつくりと余生を楽しんでいるようにも、役目を終えて長い休息期間に入ったようにも感じられた。

「ただいま」

ひっそりとした玄関で居間の方へ声をかけると、母がゆつくりと出てきた。悟が緊張した声で「こんにちは、はじめまして」

と挨拶をすると、母はたいして表情を変えずに

「いらつしやい」

と言った。そしてすぐに私に目を向け

「おかえり。涼しいでしょう、こっちは」

と笑顔を作って見せた。私の恋人の訪問を快く思っていないのだと意思表示するには充分すぎるほどわかりやすい態度だった。悟はそんな母の態度には特に気づかない様子で、私にはそれだけが救いだった。二時間ほど実家に滞在すると、私たちは竿灯の会場へ向かうために家を出た。

「また、いつでもいらしてね」

母はそう悟に声をかけたが、それが社交辞令なのは明らかだった。私はそんな母の顔を見ずに玄關の重い引き戸を開けた。

「莉子ちゃん、あまり遅くならずに帰ってきなさいよ」

背中に重くのしかかるその声に、私は返事もせずに戸を閉めた。

最後に竿灯を見に行ったのはいつだっただろう。小学生のころにはよく父や母に手を引かれて見に行った記憶がある。父の会社にも竿灯会があり、社員の子供たちがお揃いの衣装でお囃子はやしを演奏しているのが羨ましくてしかたなかった。「私もやりたい」と何度か訴えたが、二人とも曖昧に笑って首を縦には振らなかった。そのうち、叶わないことをいつまでも羨ましがるのが嫌で、祭り自体見に行くことをやめた。私が行きたくないと言うと、母は

「よかった。実は私、人ごみは嫌いなものよ」

と、ほっとしたように言った。それからもう、竿灯祭りは我が家では「ないもの」として扱われていたのだ。悟さとしが興味を示さなければ、もしかしたら一生見ることはなかったかもしれない。そんな気持ちで竿さしが上がる瞬間をぼんやりと見つめていると、なぜか涙がこぼれてくるような気がして、私は必要以上に上を向いた。

ピ——。合図の笛の音に、一斉に明かりのついた提灯ちようちんが空に揺れる。同時にどよめきのような歓声が、地面を伝わって足の裏に響いた。

「すげ——」

悟が感心してひととき大きな声を上げると、周りにいた何人かが苦笑いのような表情でこちらを振り返った。竿灯祭りは静の祭りだと思う。演者は体制を変え、竿を何本も継ぎ足し技術を競う。観客がそのバランス感覚に驚き、歓声を上げ、お囃子は熱を増していく。けれどもそこに激しさはなく、ただ粛々と全てが進んでいく。それは秋田の県民性すら映し出しているように私には思えた。夜空に揺れる提灯を見ていると、秋の実りを祈るという本来の趣旨よりも、短い夏を惜しむ人々の声が強く感じられる気がした。

祭りが終わってから何枚も写真を撮ってなかなか帰ろうとしない悟をホテルに送り、家に帰るとすでに22時を過ぎていた。父は居間のダイニングテーブルに座り、新聞を開いてウイスキーを飲んでいた。

「ただいま」

「…遅かったな」

「最後まで見てたからね」

「んだか。なんとだった？」

「別に…」

それ以上、話すことはなかった。母が悟のことを父に話したのかどうかはわからなかったけれど、二人ともその件について私と話す気はないようだった。

「疲れたからもう寝るね」

私がある場所から逃げだそうとすると、父はそこでやっと私の方に目を向け

「お前、仕事はなんとす？」

と聞いてきた。

「教員試験を受けるつもり。一応公務員試験も考えてる」

聞かれるかもしれないと想定していたおかげで、よどむことなくすらすらと答えが口から流れていた。

「こっちに帰ってくるか？」

「東京の方が、働ける場所は多いから」

それが正解だったのかどうかはわからない。けれども父は「んだか」と小さく呟くと、また新聞に目を落とした。母はテレビを見たまま「おやすみ」と言った。私はその背中に「おやすみ

なさい」と声をかけると、自分の部屋へ上がった。

秋田から東京へ戻って間もなく、悟とは別れた。はつきりとした理由はなく、彼の就職や私の教員試験の勉強のために会う時間が短くなっていたのが原因だった。そして私は教員試験に合格し、中学校の教師になった。あの夏から一度も秋田には帰っていなかった。

教師になってみて一番思ったことは、私には特に生徒に教えたいことも伝えたいこともないということだった。あくまで職業として教師を選んだ私は、教育に対するどんな熱意も持ち合わせていなかった。そしてそんな人間にとって教師という仕事は、時間対効果の薄い、付帯作業の多い仕事だった。それでも目の前の仕事をひとつずつこなしていけば、一日は淡々と過ぎていく。生徒たちもそんな熱意のない私に気づいているのか、必要以上になつくことも反抗することもなく、微妙な距離感と緊張感を持って接していた。

教師になって四年目の春だった。放課後に校内の見回りをしていると、音楽室からつたないピアノの音が聞こえてきた。ひとつひとつ、音を確かめるように、それでもなにかの曲の形を目指して楽譜を追っているようだった。私は書類をもった左手に少し力を込めた。実はいじめは春が一番多い。新しいクラス新しいメンバーに接して慣れないうちに、その不安を打ち消す

かのように一人が誰かを攻撃し出す。すると追隨ついでして何人かがその輪に加わる。いじめのターゲットとなる子供の人となりを知る前の方がやりやすいのだ。そうして新しい友人を作るかのように、新しいターゲットが決まる。いじめの芽に触れた子供はどちらも最初のうちにはシゲナルを送ってくる。ここから助けて欲しい、ここから抜け出したい、こんなことはやめたい、と。その時に気づいて摘んであげることができれば、それ以上に育つことはそうないけれど、ある程度育ってしまったいじめの芽はやがてすすくと成長し、増長ぞうちようして暴力となり、最悪の場合命まで奪ってしまう。だから春は特に子供たちの様子に気を配るように言われていた。そのつたないピアノの音は、そのことを私に思い出させた。もしかしたら行き場のない子供が音楽室でひとり、気持ちを余して鍵盤けんぱんを叩いているかもしれないなかった。

軽い緊張の中で音楽室の防音扉を開くと、大きなグランドピアノの前には生徒ではなく、教師の姿があった。

「鳥飼先生？」

昨年、他の学校から移動になってきた男性教諭だった。同僚になって一年経つが、これまで同じ学年の受け持ちになったこともなく特に話した事はなかった。

「ああ、中村先生。見回りですか？」

「はい。ピアノの音が聞こえたので」

彼は白い歯を見せて照れくさそうに笑った。

「すいません、実は弟が今度結婚することになって」

「：おめでとうございます」

「それで兄としてなにかやってやろうかと思ったんですけど、なんにも思いつかなくて。ピアノで弾き語りでも思ったんですけど、これじゃあ無理ですよね」

そういつて眼鏡の端を触ったその指は長く、女性のように白かった。

「優しいお兄さんですね」

「中村先生は、ご兄弟は？」

「います。弟が一人。でももう何年也会ってないです。実家を出てからはほとんど連絡もないし。別に仲が悪いとかではないんですけど、異性の姉弟ってそんなもんですよ」

「そうですか。うちは弟ってよりは悪友って感じですかね。たまに呼び出してはバカな話して、酒飲んで」

「そういうの、ちよつとうらやましいです」

「いや、そんないいもんでもないですよ」

遠く、屋上から吹奏楽部の生徒が管楽器を練習している音が聞こえてくる。細く開いた窓の隙間から青くさい雑草の匂いが混じった風が入り込み、クリーム色の薄いカーテンを大きく揺らした。

「僕、放課後のこの時間が一番好きなんですよ。学生の頃からずっと」

私はその言葉に小さくうなずいた。

それから校内で会うと短い会話をするようになり、二か月すると夕食に誘われるようになった。最初はなにかと理由をつけて断っていたけれど、そのうちそうして断っている方が意識していますと公言している気がして、何度か食事に行くようになった。そこからはジェットコースターに乗っているかのようにあつという間だった。食事のあとにバーに寄って何杯か酒を飲むようになり、やがて私の部屋に泊まっていくようになった。彼が結婚していて、三歳になる娘が一人いると知ったのは何度もベッドを共にした後だった。

「莉子ちゃんは教師になって何年になる？」

「来年で五年目」

「そっか。一度考える頃だな。なんで教師になったのか、とか、このままでいいのかとか」



「どうかな。私、そこまで考えて選んだわけじゃないから」

「そうなの？」

「なんでもよかったの。公務員なら」

「役人とかでも？」

「そう。役所勤めでもよかったけど、それだと実家に帰って来いって言われるかもしれないかったし」

「先生だと言われない？」

「実家は過疎化が進んでるから公立の学校が少ないの。だから東京の方が職場が多いって言い訳できる」

「なるほど。秋田だっけ？」

「そう」

「どんなところ？」

「なにもないところ。陰気で、寒くて、暗い」

鳥飼は「ははっ」と声を出して笑った。

「自分の田舎をそんなふうに言う人、めずらしいな。ましてや莉子ちゃんってそんなマイナス

発言するようには見えないから」

彼の子を妊娠していることがわかったのは、それから半年後のことだった。

「どうしたらいい？」

私の問いに、彼はなにも答えなかった。いつものように私を抱くと、その長い指で私の髪を何時間も撫で、明け方近くに静かに部屋を出て行った。

それから一カ月もたたないうちだった。どうしようか悩むにはまだ時間がある。そうタカをくくって現実を見ないようにしていた私の前に、校長は一枚の紙を差し出した。

「中村先生、これね、今日職員室のファックスに届いてたんだよ。どうかな。私は悪質な嫌がらせで、根も葉もない言いがかりだと信じたかったんだけどね。どうやら教育委員会の方にも届いているらしくて、一応、本人確認するように言われたもんだから」

A4のレポート用紙にはきっちりと揃った綺麗な字で、私が同僚教師と肉体関係を持っていること、何度も執拗に自宅に誘い込んでいること、そして妊娠していることを武器に離婚もしくは堕胎費用と慰謝料を迫っていることが書かれていた。事実と創作が巧妙に混ぜ込まれたそれは、まるでひとつの短編小説を読んでいるかのようになめらかで、私自身もどこまでが真実でどこからを否定するべきなのかわからなくなってしまうほどだった。

「どうかな」

校長室の来客用ソファ―に座り、一言も発せず、その紙に目を落としていると、校長は熱いコーヒ―を私の手元に置いた。

「全部が本当ではありません。けれども、お付き合いがあつたことと、妊娠していることは本当です」

「そうか」

「はい」

校長は優しい目で私を見ると

「子供は宝だからね。特にこれからの日本では。でも、そういう経緯で授かったことを生徒には説明できないでしょう。産むにしろ、そうでないにしろ、中村先生には申し訳ないけれども辞めてもらうほかない。それ以上のことは、私からはなにもありません。大人ですから、どんな選択をしてもそれがあなたにとっては正しいことだと思いますよ。教育実習から見てるからね。あなたが誠実な人間だということとはよくわかつてる」

誠実という言葉に泣きそうになる自分を必死で引き止めて立ち上がると、私は校長に向かつて深々と礼をした。遠く、子供たちが登校してくる声が聞こえる。おはよう、おはよう、今日は

まだ始まったばかりなのだ。

結局、そのファックスを送ったのは鳥飼の妻だった。一週間後に私の部屋に來た彼はいきなり玄關先で土下座<sup>どげざ</sup>をして、私を驚かせた。

「すまない。俺はなにも話してないし、彼女もなにも言っ<sup>て</sup>こなかったんだ。でも携帯を見られて、探偵もつけられてたみたいで。校長に送ったっていう原稿を昨日偶然見つけた。それで聞いたでしたら、学校に送り付けた<sup>って</sup>言うから…」

「そう」

そんな彼の姿に、どんな感情もなかった。

「学校を辞める<sup>って</sup>、そのせいなんだろう？俺の…いや、俺の妻の…」

「違うよ。私自身のせい。なんか疲れちゃ<sup>って</sup>」

「でもあのファックスがなければ…」

「なければ？なければどうしたと思う？産んで良かった？それとも病院に行<sup>って</sup>、全部なかったことにすればよかった？」

鳥飼は目を見開いて私を見た。

「決められなかったでしょう。私もあなたも。だからこれで良かった。とりあえず、学校は辞

める。そのあとのことはこれからゆっくり考える」

「産むの？」

まるで捨て犬のようだと思った。自分の人生を悲観して、それを誰かの手にゆだねようとしている。本当は産むことは決めていた。それまではどうしようとも考えていなかったけれど、校長に「誠実だ」と言われたことで、生徒に誠実にできなかった分、自分の中に宿った命には誠実に生きたいと思い始めていた。だがそれを彼に言っても理解はできないだろう。きっとこれは腹の中に命を抱えた女特有の感傷なのだ。

「わからない。でもこの先は一人でやってくから、心配しないで」

彼のためにあんな文章を書く人から、彼を取り上げることはできない。

「だから、もう帰って。そして、もうこないで」

私はそう言って、しとしとと暖かな雨の降る夜へと鳥飼を送り出した。もうその柔らかな髪に触れることも、長く白い指に触れられることもないのだ。扉の向こうから聞こえる雨の音は、あの日聞いた彼のたどたどしいピアノの音色に似ている気がした。

学校を辞め、これから収入がない中で出産までにかかる費用を考えると、私ひとりで東京で

暮らしていくことは不可能に近かった。実家にはしばらく帰省することにしたとだけ連絡した。電話口の母はなにか聞きだしたそうだったが、結局は言葉が見つからなかったのか「氣をつけて帰って」とだけ言った。小さな小さな声だった。

実家に帰ったところで、安心して産めるのかどうかもわからなかった。おそらくは反対され、泣かれ、相手は誰なのか、いまどうしているのかと問いただされるだろう。それでもこの命と生きていくためにはあんなに嫌っていた場所を頼らざるをえないのだ。それは東京で自分の生きる場所を作れなかった自分自身のせいだった。仕事に対しても、友人に対しても真摯に向き合ってこなかった成果がこれなのだ。そのことを考えると、新幹線の4時間弱は永遠に思えるほど長く長い苦しい旅だった。

大学三年の夏から来ていなかったはずなのに、実家の玄関はあの日と同じカビ臭い匂いがした。ただいま、と声をかけると母は前掛けで手を拭きながら出迎えにきた。私の後ろに誰かが控えているのではないかとおそるおそる覗き込むように私を見た母は、腹に手を当てる私の姿を見て

「莉子、あんた」

と言ったつきり、なにも言えなくなったようだった。

「ただいま」

私の声だけが暗い廊下にじっとりと沈んでいく。

「入ってもいい？」

立ちつくす母を横目に、私は大きなボストンバッグを置くとたたきに座って靴を脱いだ。

「いつ」

母は消え入るような声でそう言うのがやつとのようなだった。

「生まれるのが？」

「そう」

「秋の終わり、かな」

「結婚は」

「しない。学校も辞めた。一人でやっていくつもり。でもとりあえず産むまででいいからここに置いてほしい」

母に背中を向けたまま、一気にまくしたてる。すると母は足音もたてずに台所の方へと消えた。いつもそうだ。自分で抱えきれないことから目はをそらし、逃げだすところが私たちはよく似ている。その夜父はいつもよりも少し早く帰ってきた。「たまには一緒にやるかと思ってよ」

と上機嫌で買ってきた日本酒は栓も開けられないままテーブルの真ん中に置かれ、冷えた瓶には細かい水滴がびっしりと張り付いて、まるでなにかの卵のようだった。

「んで、相手はなんて」

父は母とは違い、私の目をまっすぐに見た。

「妊娠してるってことは知ってる。でも結婚しているし、彼に頼らないってことは自分で決めたの」

「なして」

「私の問題だと思ったから」

「そんなの、女ひとりの問題じゃないでしょ。相手がいなきやできないことなんだから」  
母が口を挟もうとするのを、父が制した。

「んだか。おめえが決めたっていうならそれでいい。おめえがアホなだけだ。でもアホな子供はうちではいらね。生まれるまでは置いてやってもいい。それまで家からは必要以上に出るな。近所の目もあるし、生まれたらすぐ出て行け。渡す金もねえし、うちの墓にもいれね」

「お父さんは」

「ん？」



「お父さんは、私が人様に自慢できるような子供じゃなきゃいらなかったの？」

「んだ。親はみんなそうだ」

「私はそうは思わない。無事に、健康に生まれてきてくれればそれでいい。できが悪くても、人を傷つけないでいい」

「せば、おめえのしたことは誰のことも傷つけてねんだか？」

その言葉は私の胸にぐざりと音を立てて突き刺さった。父は汗でじつとりと濡れた額を首にかけたよれよれのタオルで拭くとよいしょという小さな掛け声とともに立ち上がり、テレビの前へと座りなおした。高校野球の予選のニュースを見ながら父は買ってきた日本酒の瓶を開け「この頃は良かった（よかった）な」

とひとり言をいった。私も母もテーブルに視線を落したまま、夜はどこまでも深く静かに過ぎていく。

その年の最初の灯油売りのトラックが『月の砂漠』のメロディーとともに町内をまわる頃、私は一人で男の子を産んだ。病院に誰も付き添いが来ない私のことを看護師たちは誰もが同情的なまなざしで見つめ、必要以上に優しく接してくれた。鳥飼にも子供が無事生まれたというこ

とだけは伝えたくて携帯アドレスにメールを送ったが、宛先不明で戻ってきてしまった。学校のパソコンのアドレスに送れば届くだろうと思ったけれど、職員室でそれを開く彼の顔をどうしても想像できなくてやめた。退院の日、私はその足で不動産屋に行き、新しい部屋の契約をすませた。そのせいで出産費用で思ったよりも余った貯金の残りはだいぶ少なくなったけれど、やっと私にたった一人の味方ができたのだ。これから二人で生きていく、そのスタートには今日がたぶん一番いい日だ。

荷物を取りに実家に寄った私の胸に抱かれた赤子を、母は一度も見ようとはしなかった。私は手早く荷物をまとめ「じゃあ、行くね」と声をかけた。母は

「あなたが生まれた日はね、春の陽気が気持ちいい日だった。今日みたいに曇った寒い日じゃなかった」

それがどうしたというのだろう。はなむけの言葉には到底聞こえない。

「さよなら、お母さん」

秋田に帰ってから一度も流した事のない涙が頬をつたい、胸に抱いた息子の頬に落ちた。けれども彼はそんなことはまったく気にならないようで、ひたすら深く眠り目を開けることもない。外に出るとひやりと冷たい風が、濡れた頬をすばやく乾かしていく。私はできるだけ早く

その家から遠ざかれるようにと大股で歩き出した。

次の年の夏、母はいきなり携帯電話に連絡をよこした。

「お父さんが、手術することになった」

まるで電報のような抑揚のない言い方だった。

「え、なんで」

私は息子をベビーベットに置くと、哺乳瓶ほにゅうびんを持っていた右手に電話を持ち替えて強く握った。じわじわと汗が手のひらににじみ出て、力を入れないと滑り落ちてしまいそうだった。

「大腸がんだって。まだ初期だと思いつて先生は言うんだけど、開いてみないとわからないって」

「お父さんの様子は」

「なんともね、って言ってるけどね。食欲は少しくなった」

「そう」

うまく哺乳瓶が吸えないのか、息子は手をパタパタさせてぐずり出した。母がその声に反応する。

「もう、歩くの？」

「まさか、まだ九カ月になったばかりよ。つかまり立ちはするけど」

短い沈黙のあと、母はなにかを決意したようだった。

「お父さんの様子、見に来る？」

近所の目もあるのだから、息子をつれて実家には来ないで欲しいというのが両親の共通意見だった。田舎の人は噂好きで、しかもそのスピードは想像以上に早い。両親にとっては県で一番の進学校に子供二人を入れた、という栄光の過去をそのままいつまでもひきずっていたのだ。それでも同じ市内にいれば、いずれどこからかばれてしまうのではないかと思っていたけれど、今のところそれは免れているようだった。

「行っているの？」

「病院に来られるよりはましだから」

もう少し息子が大きくなったら、いずれ秋田を出て行くつもりだった。乳飲み子を抱えて土地勘のないところに引越すのは難しかったし、東京に戻るには経済的にも、子供を預ける保育園の数の少なさ的にも無理そうだった。幼稚園に行く頃にはどこか他の土地で新しく生活を始めようと考えていた。そうすればもしかしたら二度と両親に会うことはないかもしれない。ま

だ一度も会っていない孫に、彼らは会いたいとは思っていないだろうが、会わせたいという私のエゴのようなものは心の隅で消えずに小さく残っていた。

「じゃあ、行く。一度だけ」

母は「わかりました」と言うと、なぜだか少しほっとしたように電話を切った。手に張り付いたような携帯電話を見つめていると、息子は空になった哺乳瓶をぽいと投げて、私に向かつてニツコリと笑って見せた。

一年ぶりに見る父は、少し痩せたようだった。それが病気のせいなのか、単に歳を重ねたせいなのか計りかねるぐらいの、微妙な痩せ方だった。

「これ」

手土産のシュークリームを差し出すと、父は「最近酒もやめたからな。甘いもんばっか食ってら」とまんざらでもない様子でそれを受け取った。そして私の胸にぴたりと頬をくっつけて抱かれる息子の方を向き「何カ月になったんだか？」と言った。

「ついこの前、九か月になった」

「思ったより大きいもんだな」

「そう？」

「んだ、最後に赤子見たのはもう二十六年前になるべ。忘れたな」

弟のことを言っているのだ。弟も仙台の大学に行って、そのまま研究職で就職しほとんど実家には帰ってきていないようだった。父から受け取ったシュークリームを来客用の皿に盛り付け、アイスコーヒーと一緒に母がテーブルへ運んでくる。

「こないいい皿じゃなくていいのに」

私がそう言うとも母は

「使わないと、皿もダメになるばかりだから」

と抱っこひもから出されてテーブルに手について立つ息子の方を見ながら言った。

「思ってたより大きいもんね」

「お父さんと同じこと言ってる」

思わず私が笑ってしまうと、二人の顔も少しほころんだようだった。

「あんた、今晚なんか予定あるの？」

母は危なっかしい足取りで立つ息子から目を話さずに言う。

「ないよ」

「じゃあ、夕飯でも食べに行く？」

「いいけど、お父さん大丈夫なの？」

「入院する前に焼き肉に行きたいんだって。でも二人っていうのもなんだかね」

父は新聞紙を細く切って、ふわふわと息子の前に踊らせて気を引いている。息子はきやつきやつと歓声を上げながら、それを掴もうとしてはバランスを崩して座りこんだり、また立ち上がりたりしていた。

「二人もなんだけど、四人でもいいの？誰かに見られたり」

「そしたら親戚の娘さんってことにするわ」

冗談ではなく本気でそう言っている母に、悪気などないことはわかっていても埋められない距離を感じずにはいられない。でもこれが最後の親孝行になるのかもしれない。私は「いいよ、付き合う」と答えた。

早めの夕食を終えて店を出ると、遠くお囃子の音楽が聞こえてきた。どこかの駐車場で竿灯の練習をしているようだった。私たちは誰が言い出すわけでもなく、その音のする方へゆつくりと足を進めた。

「何年ぶりだ、竿灯なんて」

父が息子を抱きながら空を仰ぐ。練習だからなのか、提灯には半分くらいしか明かりが入って  
いなかったが、それでも夜空に揺れる橙色の光はきらきらとまばゆく光っていた。私と母はそ  
れを少し後ろから離れて見ていた。

「子供のころ、私、お囃子やりたいてって言ったよね」

ふいに懐かしく苦い思い出がよみがえってきて、思わず口に出てしまう。私の責めるような口  
調に母は少し驚いたようだった。

「あつたかもね。覚えてないけど」

「私、やりたいこといっぱいあつたよ。お囃子もそうだし、バレエも習いたかつたし、ピア  
ノも習いたかつた。本当は勉強なんか苦手嫌い、あの高校にも行きたくなかつた。公務員  
になんかなりたくなかつた。一度も自分の人生を自分の足で歩いてるって気持ちになれなかつ  
た。教師っていう仕事についても、どんな情熱も持てなかつた」

今まで思い出した事のなかつたことまで思い出されて口から飛び出してくる。まるでなにかの  
スイッチを押したかのように。

「お母さんだけでも私の味方でいてくれたら、相談したいこと、たくさんあつたよ」

お囃子の笛はますます強く早く渦を巻くように私たちの間を流れていく。



「じゃあ、あなたは私のダメだと思う部分を繰り返さないように、あなたのやり方でこれからしっかりとあの子に向き合えばいい」

私が押し黙ると、母は強く、ゆっくりと言った。

「親は誰も、子供の人生を壊したくてルールを引くわけじゃない。でも結果的にそれがあなたをここまで苦しめてきたんだとしたら謝るわ。けれども、あなたが最後にしたことも充分に私とお父さんを苦しめた。大切に育ててきた娘を、きちんと結婚させて、花嫁衣装を見て、生まれたばかりの孫を抱く。そういう普通のことをなにひとつさせてくれなかったんだから。もう私たちの子供じゃない。一人の立派な大人として、自由に生きて。今さらって思うかもしれないけれど、過去は取り戻せないんだから」

母にはわからないのだ。私が欲しかったのは謝罪なんかじゃない。ただ、抱きしめて欲しかった。こんな風に親を裏切るようなことになっても大切な娘だということに代わりはないのだとその口から聞きたかった。そしてできることならその胸で泣きたかった。そうすれば私はまた次の場所に行ける。今度こそ自分自身の足で。

大きく響く太鼓の音に疲れたのか、息子がぐずり始める。父は名残惜しなごりおそうに息子を私に手渡した。

「じゃあ、お父さん、手術頑張つて。病院には行けないと思うから」

「ん。なんもだ。まず、お前もしっかりやれ」

「ありがとう」

大きく手をあげた父の数歩後ろに小さな母の姿が見えた。夜の闇の中ではその表情まではよくわからない。息子はしきりに私の胸元に自分の顔をこすりつけてくる。私は熱を帯びて熱く火照るその小さな手をぎゅっと強く握ると、自分の小さなアパートへと足を向けた。お囃子の音楽は大きくなったり小さくなったりしながら、私たちの後ろをまるでさざ波のようにいつまでも着いてきた。竿灯祭りが終わるころ、秋田を出よう。そしていつか、大きくなった息子の手を引いて祭りを見に来よう。その時はまた違う話が母とできると信じて。この町特有の重く湿った夏の空気を胸一杯に吸い込んで、私はそう決めた。

「優秀賞」受賞者のことば

遠きにありて思ふもの

渡部 麻実

よく「ふるさととは遠きにありて思ふもの」と言いますが、十八歳で東京に出た私にはずっと意味のわからない言葉でした。親の干渉や一年のほとんどを雪や曇天に閉じ込められるような息苦しさが嫌で一刻も離れたい場所、それが子供だった私にとっての『ふるさと』でした。生まれ育った場所で過ごした時間よりも東京で過ごした時間の方が長くなり、新しい家族ができた自分の子供を持つと『ふるさと』は今までは違った色を持って私に迫ってくるようになります。その不思議な感覚は簡単には言葉でできるものではありません。昨日まで嫌っていたものを今日から好きとは言えないように、私にとって『ふるさと』はまだ心から愛すべきものにはなっていないのですが、少しでもその距離が近くなったように思えるのです。

秋田を題材にした小説を書けるというのは、そんな私にとって幸せな挑戦でした。昔は恋人

いつか、夏が終わる前に

と見た竿灯祭りを、二十年ぶりに子供の小さな手を繋ぎながら見ていると、色々な感情が渦<sup>うず</sup>のように沸き上がり原稿用紙に流れていきました。まだまだ書きたいことはたくさんあります。そんな魅力にあふれた秋田で生まれ育ったことを誇りに思えるよう、これからも頑張っています。

選

評





## 取材を増やし、偶然を減らせ

内 館 牧 子

最終選考には小説七編、随筆三編の計十編が残され、それぞれ丁寧に読ませて頂きました。選考会当日は、選考委員三人ともが、ふせんをびっしり貼った応募作を持って集まりました。全体を通し、私が気になったことは三点あります。

一点目は、あまりにも取材をしていないということです。

おそらく、実際に現地や現場に行かず、インターネットで調べて書いたり、関係者と話すこともせずに書いたのではないかと思われる浅さです。各委員から「ここ、何も調べずに書いてるね」とか「今はこのやり方ないよ」とか細かいダメ出しがありました。

応募作のために自腹で取材地に行くのは負担が大きいと思いますが、ネットで調べて書いたものは間違いも多く、浅く、香りがしません。応募作であればこそ、認めてもらわなければなりません。ネットでコチョコチョコとでっち上げるのではなく、現場に行き、現場を自分の体に

取りこんで書くことを、意識して頂きたいと思います。

もうひとつ気になった点は、小説の登場人物があまりにも類型的なことです。

例えば、以下は私が作った一例ですが、「一人っ子はワガママ」、「東北出身者は無口で忍耐強い」、「ママ友は意地が悪い」等々です。こういうありきたりな人たちが出てきて、ありきたりなことをする。これでは小説になりません。

三点目は「偶然が多すぎる」ということです。

せっかくうまく書いているのに、最後に偶然が重なって解決したり、大団円を迎えたりする。こうなると全部が安っぽくなり、「何だア？これ」となってしまう。「偶然」は安易に使わない方がいいと考えてください。

『横手盆地で農を継ぐ』は、決して書き慣れている人とは思いませんが、何よりも全編を通じて気迫がすごい。花鳥風月を愛でる随想と一線を画し、二〇才で農業を継ぎ、今に至るまでの心の揺れを描いています。であればこそ今、「私は横手盆地の稲と同化します」という一文が胸にしみます。ついにこの地点に到達した男を、これほど表現した文章はないでしょう。三人の満場一致で最優秀賞でした。

私は森川瑠美子さんの『みちのく鬼譚』<sup>きたん</sup>も高く評価しています。発想も面白いし、構成も

うまい。何よりも、なまはげを通してそこはかたない悲しみが出ており、いい作品だと思います。ただ、列車の時刻などが現実と違っていたりはずい。事実をきちんと押さえ、確認する作業がもつと必要でした。

同じく優秀賞の渡部麻実さんは、森川さんと同点の高得点で、最後まで最優秀賞一編の座を争いました。母がやや類型的だと感じましたが、構成もうまく、台詞の扱い方が達者で、かなり書いている人ではないかと思いました。親になることの、子として生まれることの、逃<sup>のが</sup>れられない罪と悲しみにふれたかったのかも……と思わされる作品でした。委員三名でさんざん話し合いましたが、森川作品と甲乙つけがたく、今回は優秀賞二編ということになりました。

どの作品からも秋田には愛も憎もあるが、どうしても秋田を切るができないという心が伝わってきます。秋田は幸せな県だと思わされました。







## 一歩上に

塩野 米松

作品を書く第一歩は「まずは最後まで書くこと」です。

小説を書きたいと思っている人はたくさんいます。そういう人達はみんなどうすればいいかと悩んでいます。相談されて私が言えることは「最後まで書いてみることです」だけです。そこからしか始まらないのです。アイデアや構成がいくら素晴らしくても書かなければ、作品にならないし、読んでももらえないのです。

今回は100本近い作品が応募されました。素晴らしいことです。それだけの方がスタートラインに並んだことになります。

次の一歩は「ちゃんと書くこと」です。

読んでもらうためには、読んでもらえる作品に仕上げなければなりません。明らかなウソや、主人公の職業や舞台のこと、交通手段、その時代の背景、服装、食べ物、考え方、使う言葉な

どを何も知らずに書いたのでは、読者はついてきてくれません。「違うんじゃないの」「変だなあ」「まちがってるよ」「こんなこと絶対無い」と思ってしまったら、登場人物に感情移入ができませんからです。

そのためには、登場人物のことや時代、職業などをしっかり調べなくてはなりません。舞台の場所には行ってみなくてはなりません。知らない職業は取材して、話を聞きに行ったり作業を見に行かなくてはなりません。その中で、登場人物が動き出してはじめて読み手が物語に引き込まれていくのです。そして「なるほどなあ」「そうなんだ」「どうなるんだろう」と思うのです。

そして次の大事なことは自分の言葉で書くことです。自分の言葉で書くためには自分の言葉で考えなければなりません。設定した登場人物達がおざなりで、出来事も事件もどこかで聞いたようななかでは、自分の考えは生み出されてきません。微に入り、細に入り、具体的に描き上げて、その中から自分ならこうする、こんな言葉を話させたい。こんな風景をこう描きたいという思いが言葉を生み出すのです。

今回の優秀賞『みちのく鬼譚』『いつか、夏が終わる前に』は、いいアイデア、構成だと思えます。あとはリアリティと自分の言葉を紡ぐことです。でもこのお二人は十分に書くことの

楽しさを知っていらつしやると思います。この後への期待を込めて優秀賞に推薦しました。

最優秀賞『横手盆地で農を継ぐ』の鈴木利良さんの作品は小説でもエッセイでもない、普通の文学賞では対象として扱いづらい分野です。秋田文学賞が「秋田を題材とした」という特異な文学賞なので、この作品を最優秀賞に推しました。ご自分の言葉で、鈴木さんの人生をかけた言葉が持つ重さが、心に響きます。野球の投手で云えば、魔球のフォークを持っているわけでも、160キロ近い豪速球を投げるわけでもありません。それでも重く、ずしんと捕手のミットに収まる球を投げるのが出来たのです。人生の乗った重い球です。こうした作品を最優秀賞に選ぶことで、秋田文学賞は間口を広げたと思っています。

多くの方が応募してくださること、それを機に書くことのおもしろさを知ってくれたらこの賞の意味が大きくなると思っています。次回作を楽しみにしています。





## 選評

西木 正明

物書きになってかれこれ三十五年、それなりに馬齢を重ねる間、多くの文学賞の選考にも関わってきたが、その間自分に課してきた約束ごとがある。

候補作はかならず二度通読すること。これは最低限で、時には同じ作品を三度、あるいは四度読み直すこともある。なぜそうするか。理由は簡単で、かつて自らがそうであったように、発表する宛のない原稿を必死になって執筆している、書き手の姿が想像出来るからである。

まちがっても読み間違いがあつてはならない。もしかすると、とてつもない才能が目の前にいるのかも知れないのに、それを読み違えて捨て去るようなことがあつてはならない。書き手に対して言い訳が出来ないだけでなく、文筆を職業として生きている者として、自らの非力をさらけ出していることに他ならないからだ。

この度のふるさと秋田文学賞の最終候補作を受け取り、前述のような構えで全作品に目を通

してまず感じたことは、驚きと戸惑い、そしてほかの文学賞では感じることはない、ある種の新鮮さであった。

小説と随想が、同じルールのもと、同じ舞台の上で戦っている。これをスポーツの格闘技に例えていえば、相撲と柔道、アマチュアのレスリングとプロレス、拳闘と空手が、同じ土俵あるいは畳、リングないしマットの上で戦っているようなものだ。

二度目を通読して、思わず声をあげて笑った。選者の当惑とは裏腹に、いずれの候補作もののびのびとしておおらか、くったくのない出来ばえだったからだ。

まずは今回の入選作となった鈴木利良さんの『横手盆地で農を継ぐ』は、とにかくその勢いと熱意が尋常ではない。それを素朴な文章で書き表しているところに好感が持てた。

森川瑠美子さんの『みちのく鬼譚』<sup>きたん</sup>は、小説としての完成度はともかく、全体に流れるファンタジックな雰囲気良かった。渡部麻実さんの『いつか、夏が終わる前に』は、『みちのく鬼譚』とは対照的にいかにも小説らしい出来ばえで、文章も良く安心して読めた。惜しむらくは登場人物が類型的で、それが読後感をやや弱いものになっている。

というわけで、ほかの多くの文学賞受賞作とはいささか違う意味で、楽しく読ませていただいた。

作品募集要項・応募者内訳一覽





## 第2回ふるさと秋田文学賞 募集要項

### ●募集作品

秋田県を舞台とした、あるいは秋田県内の自然・人物・風土・物産などを題材とした随筆・小説・紀行文

### ●応募資格

年齢・性別・職業・国籍を問わず、どなたでも応募できます。

### ●作品募集期間

平成27年4月1日(水)から平成27年8月31日(月)まで  
郵送される場合は、当日消印有効です。  
直接持参される場合は、平日の午前9時から午後5時までとします。  
(電子メール・ファクシミリ・電子データでは受付しません。)

ご注意  
送付部数は  
4部(コピー可)  
です。

### ●賞

- ・最優秀賞 1編 (正賞/賞状および県産品・副賞/賞金50万円)
  - ・優秀賞 1編 (正賞/賞状・副賞/賞金5万円)
- ※ 後日、入賞作品を収録した作品集を作成します。

### ●選考委員

内館牧子 氏 (秋田市出身 脚本家)  
塩野米松 氏 (仙北市:旧角館町出身 作家)  
西木正明 氏 (仙北市:旧西木村出身 作家)  
<五十音順>

### ●応募要領

- ・A4判の400字詰原稿用紙50枚以内に縦書きとします。  
(ワープロ原稿はA4判横長とし、必ず400字詰原稿用紙換算枚数を明記してください。)
- ・日本語で書かれた自作未発表のもので、1人1編に限ります。二重投稿は失格とします。
- ・応募作品の表紙に、①作品のジャンル、②題名、③原稿枚数、④氏名、⑤郵便番号、⑥住所、⑦電話番号、⑧年齢、⑨性別、⑩職業(学生の場合は学校名)、⑪引用または参考とした文献・資料、⑫募集を知った方法(新聞・雑誌名・ホームページ等)を明記してください。題名と氏名には必ずふりがなを明記してください。
- ・ペンネーム使用の場合は、本名(ふりがな)を必ず明記してください。
- ・200字程度にまとめた内容紹介を表紙の次のページに添付してください。
- ・電子データでの応募は不可。原稿は、必ず通しページ番号をつけ、表紙、内容紹介を書いた紙を添付の上、右肩を紐やクリップで綴じて4部お送りください。なお、送付原稿はコピー原稿可。
- ・応募原稿に記入された個人情報は、本文学賞の選考、結果等の連絡を目的に使用し、あらかじめご本人の同意なく第三者に開示することはありません。
- ・応募いただいた作品は一切返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。
- ・入賞作品の著作権は、すべて主催者に帰属します。

### ●選考結果の発表

- ・平成27年10月中旬、入賞者に直接通知するとともに、ホームページでも発表します。  
(選考についての問い合わせにはお答えできません)
- ・表彰式は、平成27年11月1日(日)「読書のつとめ2015秋(仮称)」で実施の予定です。

### ●応募・問い合わせ先

秋田県読書活動推進本部  
秋田県企画振興部 総合政策課 県民読書推進班  
〒010-0952  
秋田県秋田市山王新町14-31 秋田県立図書館内  
電話 018-862-5200 <平日:午前9時~午後5時>  
ホームページ「あきたブックネット」に詳しく掲載しています。

## 「第2回ふるさと秋田文学賞」応募者内訳一覧

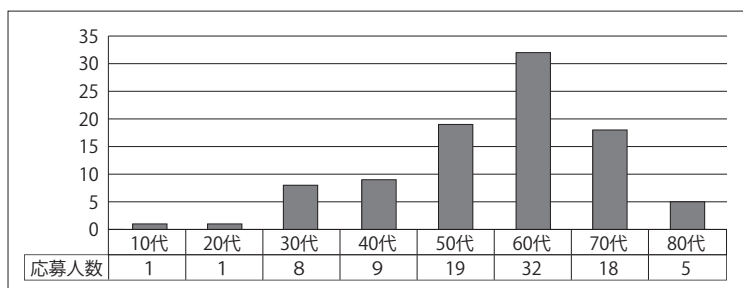
ジャンル別応募数

|     |    |
|-----|----|
| 随筆  | 36 |
| 小説  | 52 |
| 紀行文 | 5  |
| 計   | 93 |

性別応募者数

|   |    |
|---|----|
| 男 | 55 |
| 女 | 38 |
| 計 | 93 |

年代別応募者数



都道府県別応募数

|        |    |
|--------|----|
| 県内     | 61 |
| 県外     | 32 |
| 1 東京都  | 7  |
| 2 神奈川県 | 6  |
| 3 千葉県  | 3  |
| 4 埼玉県  | 3  |
| 5 栃木県  | 2  |
| 6 青森県  | 1  |
| 7 岩手県  | 1  |
| 8 宮城県  | 1  |
| 9 茨城県  | 1  |
| 10 群馬県 | 1  |
| 11 福井県 | 1  |
| 12 静岡県 | 1  |
| 13 滋賀県 | 1  |
| 14 京都府 | 1  |
| 15 大阪府 | 1  |
| 16 広島県 | 1  |
| 計      | 93 |

募集を知ったきっかけ

|   | きっかけ    | 件数 |
|---|---------|----|
| 1 | チラシ     | 37 |
| 2 | 公募ガイド   | 15 |
| 3 | 新聞      | 14 |
| 4 | インターネット | 13 |
| 5 | 市町村広報等  | 5  |
| 6 | 不明      | 4  |
| 7 | ポスター    | 3  |
| 8 | 家族・知人   | 1  |
| 9 | その他     | 1  |
|   | 計       | 93 |

- チラシ 37 件内訳（送付 11、図書館 8、町内回覧板 4、道の駅 3、公民館窓口 1、不明 10）
- 新聞 14 件内訳（秋田魁新報 8、朝日新聞 1、不明 5）
- インターネット 13 件内訳（秋田県 H P ※あきたブックネット含む 8、不明 5）
- ポスター 3 件内訳（県立図書館 1、市立図書館 1、不明 1）
- その他 1 件内訳（フリーペーパー 1）

第2回ふるさと秋田文学賞受賞作品集

発行日

平成二十八年二月一日

発行

秋田県

編集

秋田県企画振興部総合政策課

電話〇一八（八六二）五二〇〇

